

あか ばたけ
赤畑遺跡・天神山遺跡
てん じん やま
山口館跡
やま ぐち たて あと

北部環状線道路関係
埋蔵文化財調査報告書

赤畑遺跡↓

山口館跡

↑
天神山遺跡

1998. 3

岩手県宮古市教育委員会

あか ばたけ
赤畑遺跡・
てん じん やま
天神山遺跡・
やま ぐち たて あと
山口館跡

北部環状線道路関係
埋蔵文化財調査報告書



遺跡遠景空中写真(南より)

Photo.1

1998. 3

岩手県宮古市教育委員会

序

三陸地方の沿岸部には、数多くの遺跡が所在しており、私たちの住む宮古市にも、先人たちが残した貝塚や館跡、そして集落跡など453ヶ所もの遺跡があることが知られています。

これらの遺跡は、数千年前の縄文時代から、中世さらに近世までの長きにわたる歴史を、現在の我々に語り伝えてくれる貴重な財産であります。私たちはこのような遺跡を、正しい理解とともに、後世に伝え残していく責務があると考えております。

本書は、北部環状線道路新設工事に係る赤畑遺跡、天神山遺跡の発掘調査、そして山口館跡の試掘調査の結果をまとめたものであります。報告書として刊行することにより埋蔵文化財への理解がなお一層深まることを願うとともに、この調査記録が地域資料として活用されることを望むものです。

最後になりましたが、発掘調査および本書の刊行にあたり多くの方々にご協力、ご支援を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成10年3月

宮古市教育委員会
教育長 中屋定基

例 言

1. 本書は、宮古市山口地内に所在する赤畑遺跡、天神山遺跡および山口館跡の発掘調査報告書である。なお、山口館跡については遺跡の内容、範囲等を確認するために実施した試掘調査の結果を報告するものである。
2. この調査は、北部環状線道路新設工事に伴う事前調査で、宮古市建設課と宮古市教育委員会との協議に基づき、平成6年度から7年度にわたって実施されたものである。
3. 本書の作成にあたり、宮古市文化財保護審議会委員斉藤英樹氏よりご教示を賜った。記して感謝の意を表すものである。
4. 調査主体は宮古市教育委員会であり、発掘調査および資料整理は社会教育課の橋本晃一、工藤剛司、竹下将男が担当した。また報告書の編集・執筆は竹下が行い、その他担当職員がこれを補佐した。
5. 遺構の平面位置は任意に設定した座標を用い、方位は磁北を示す。また、レベル数値は標高値を示したものである。
6. 土層の観察、表記にあたっては、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原英雄編著 1990)を使用した。
7. 出土遺物、発掘調査資料は宮古市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

I 序 章	1
1 調査に至る経過	
2 調査概要	
3 調査体制	
II 立地と環境	3
1 遺跡の位置と立地	
2 周辺の遺跡	
III 調査内容	
1 天神山遺跡	7
2 赤畑遺跡	13
3 山口館跡	20
報告書抄録	26
写真図版	27～40

挿図目次

Fig. 1	遺跡位置図	3
Fig. 2	地形区分と遺跡分布図	4
Fig. 3	周辺の遺跡	5
天神山遺跡		
Fig. 4	遺跡周辺の地形と調査区	7
Fig. 5	基本土層図	8
Fig. 6	調査区全体図・土層断面図	9
Fig. 7	陥し穴状遺構平面図・断面図	10
Fig. 8	出土土器拓影	12
赤畑遺跡		
Fig. 9	遺跡周辺の地形と調査区	13
Fig. 10	基本土層図	14
Fig. 11	第1調査区平面図	16
Fig. 12	第1調査区土層断面図	16
Fig. 13	第2調査区平面図	17
Fig. 14	第2調査区土層断面図	17
Fig. 15	出土遺物	19
山口館跡		
Fig. 16	山口館跡と調査地点	20
Fig. 17	調査区配置図	23
Fig. 18	出土遺物	25

写真目次

	遺跡遠景空中写真	表紙
Photo.1	遺跡周辺空中写真(カラー)	内表紙
Photo.2	遺跡周辺垂直写真	27
天神山遺跡		
Photo.3	天神山遺跡空中写真	27
Photo.4	天神山遺跡遠景	28
Photo.5	EW-1~3, NSトレンチ	28
Photo.6	EW-1Tr. 陥し穴状遺検出状況	28
Photo.7	陥し穴状遺JT01,02	29
Photo.8	陥し穴状遺JT01	29
Photo.9	陥し穴状遺JT02	29
Photo.10	陥し穴状遺JT01埋土状況	30
Photo.11	基本土層堆積状況(TP-N)	30
Photo.12	出土遺物	30
赤畑遺跡		
Photo.13	赤畑遺跡空中写真	31
Photo.14	第1調査区遠景	31
Photo.15	第1調査区調査前の状況	31
Photo.16	第1調査区A~Cトレンチ	32
Photo.17	Aトレンチ検出状況	32
Photo.18	Bトレンチ検出状況	32
Photo.19	Cトレンチ検出状況	33
Photo.20	土層堆積状況(Bトレンチ)	33
Photo.21	火山灰検出状況(Aトレンチ)	33
Photo.22	第2調査区遠景	34
Photo.23	第2調査区調査前の状況	34
Photo.24	Dトレンチ検出状況	34
Photo.25	Eトレンチ検出状況	35
Photo.26	Fトレンチ検出状況	35
Photo.27	F-NSトレンチ土層堆積状況	35
Photo.28	F-NSトレンチ黒褐色土堆積状況	36
Photo.29	出土遺物	36
山口館跡		
Photo.30	山口館跡空中写真	37
Photo.31	第1トレンチ検出状況	37
Photo.32	第2トレンチ検出状況	37
Photo.33	第2トレンチ竪穴住居跡検出状況	38
Photo.34	第4トレンチ竪穴住居跡検出状況	38
Photo.35	第6トレンチ検出状況	38
Photo.36	第6トレンチ石垣の状況	39
Photo.37	第13トレンチ検出状況	39
Photo.38	第14トレンチ検出状況	39
Photo.39	第15トレンチ竪穴住居跡検出状況	40
Photo.40	第4トレンチ出土遺物	40
Photo.41	第2、6、15トレンチ出土遺物	40

I 序 章

1 調査に至る経過

市道北部環状線道路は、国道45号線と106号線が宮古市内で交差していることによって起こる交通渋滞の緩和と、県立宮古病院へのアクセス路線の整備などを目的とした新設道路である。

この事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、宮古市建設課と宮古市教育委員会とにより事前協議が行われ、予定路線内の現地踏査が実施された。その結果、複数の遺跡が路線内に所在することが明らかとなり、計画の決定にあたっては埋蔵文化財の保存に配慮するよう協議を進めた。

平成4年には路線が決定され、山口地区では県道から本線に至る取付道路内に天神山遺跡、赤畑遺跡が所在し、本線内には山口館跡などの遺跡が含まれることとなった。これらの遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、事前調査・範囲確認調査を宮古市教育委員会が実施することとなり、平成6年度には天神山遺跡、平成7年度は赤畑遺跡について発掘調査を行い、山口館跡については平成6と7年度に内容、範囲等を確認するため試掘調査を実施するに至った。

2 調査概要

(1) 天神山遺跡(LG23-2246)

所在地 宮古市大字山口第11地割字赤畑2番8、山口二丁目41番2
発掘調査期間 平成6年7月20日から平成6年11月18日
調査面積 794平方メートル
立地 山口川左岸の標高49～56メートルの丘陵上に立地し、河川からの比高は約40メートル
検出遺構 陥し穴状遺構 2基
出土遺物 弥生時代後期土器

(2) 赤畑遺跡(LG23-2215)

所在地 宮古市山口5丁目8番1、3、14、15、16、17、10番6
発掘調査期間 平成7年9月28日から平成7年11月24日
調査面積 1,180平方メートル
立地 山口川右岸の標高26～32メートルの北東向きの緩斜面
検出遺構 遺物包含層
出土遺物 縄文時代中期、後期、晩期の土器

(3) 山口館跡(LG23-2310) 試掘調査

所在地 宮古市大字山口第5地割字久保17番1、23番、28番1、22番1、24番、26番、28番、33番、34番、35番、39番1
発掘調査期間 平成6年12月5日から平成6年12月27日
平成7年9月28日から平成7年12月23日
調査面積 1,710平方メートル

立 地 山口川左岸の標高50～120メートルの丘陵および緩斜面
 検 出 遺 構 竪穴住居跡(古代)、土坑、柱穴
 出 土 遺 物 縄文時代の土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、陶磁器

3 調査体制(平成6、7年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	佐藤勇逸
調査総括	浦野 光廣	宮古市教育委員会社会教育課長	
事務担当	田鎖 春雄	同	社会教育係長
	野崎 政博	同	社会教育課社会教育主事
	坂下 昇	同	社会教育課庶務主査兼社会教育主事
調査員	竹下 将男	同	社会教育課主任(調査、資料整理、報告書担当)
	高橋憲太郎	同	社会教育課主任
	鎌田 祐二	同	社会教育課主任
	橋本 晃一	同	社会教育課主事(調査、資料整理担当)
	三浦 千秋	同	社会教育課主事
	阿部 豊	同	社会教育課埋蔵文化財調査員
	工藤 剛司	同	社会教育課埋蔵文化財調査員(調査、資料整理担当)

発掘調査および資料整理作業にあたり、次の方々から多大な協力をいただいた。記して謝意を表します。(敬称略、順不同)

《発掘調査》 中居磯雄、今津東一、刈屋昭三、大越貞蔵、小野寺青治郎、菊池清八、三浦 力、山内専太郎、佐伯裕則、佐々木茂実、吉田 昭、中屋東一、北村忠治、伊藤晴男、斎藤貞子、藤谷晶子、菅原テルミ、中嶋正裕、坂下節朗、松尾喜一郎、島田義道、三浦貞行、佐々木紀行、福士祐二、在原正利、佐野利男、古舘友三、永田美弥子、久保田チエ、中村京平、舘崎 登、小林尚一、和田與之助、上坂弘之、博田友国、大森 繁、藤田満里子、伊東幸司、中澤 稔、増坂秋朗、撰待太一、古舘はる、切角松五郎、高橋貞兆、崎尾由美子、長野賢一、清水川学、岩間伸昌、下沢安男、小成裕信、富塚保也、君沢和三郎

《資料整理》 斉藤英樹、久保田加代子、佐々木ヨシ子

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

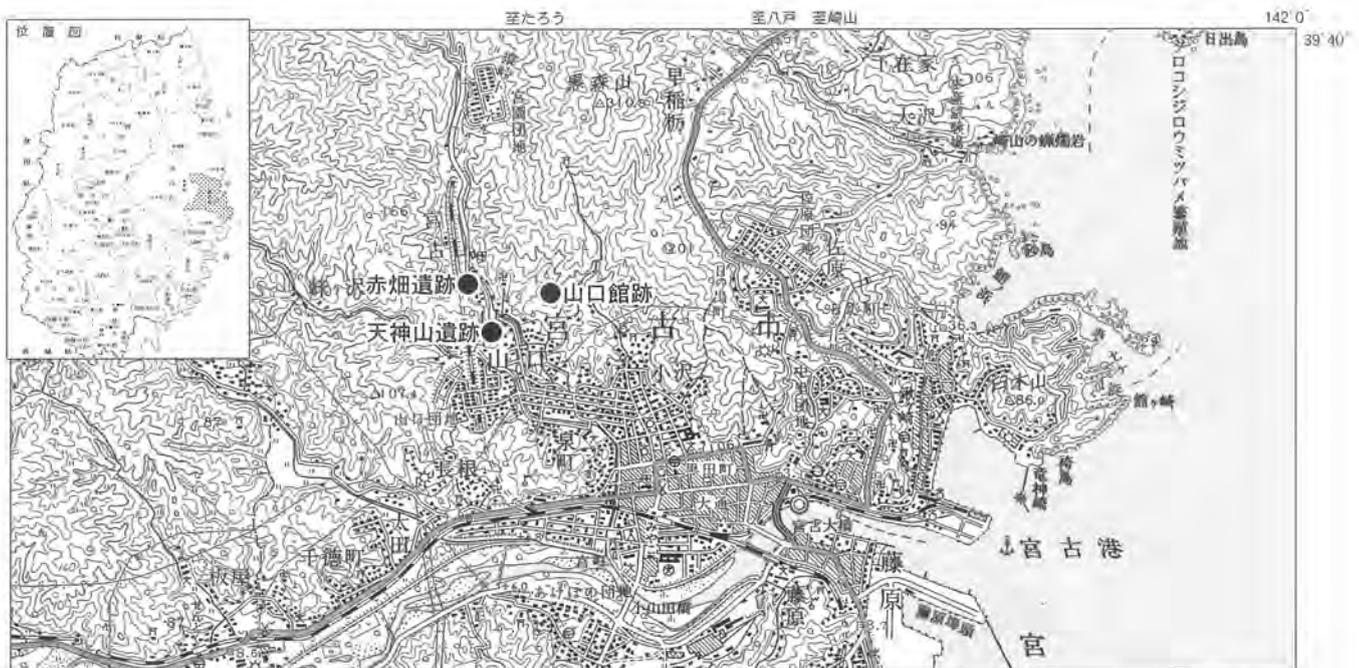
宮古市は岩手県の東端にあり、陸中海岸のほぼ中央に位置する。市域の総面積は338km²で、本州最東端の鮫ヶ崎(東経142°04′)から、西は長沢牧場(東経141°45′)に至り、新里村と境を接する。南北は、山田町に接する石浜海岸(北緯39°30′)から、亀ヶ森(北緯39°43′)に至る範囲で、その北は田老町、岩泉町となる。

宮古市内の地形は、多くの部分が丘陵・山地で占められ、平野・低地は北上山地から東流する閉伊川の流域と、山田町から北流する津軽石川の流域およびこれらの支流域に僅かに見られる。宮古湾から津軽石川に至る津軽石断層を境に、東部には重茂半島の山地帯が太平洋に張り出し、西部は北上山地から続く中・小起伏の山地および丘陵帯となっている。また西部は閉伊川によって南北に分断されている。山地帯の縁辺部には丘陵地が形成されており、これらの丘陵地は小河川により樹枝状に開析され、末端は尾根状を呈している。これらの丘陵上や山麓緩斜面に多く遺跡が所在している。

天神山遺跡・赤畑遺跡・山口館跡は、J R 宮古駅から北西約1.8kmの山口地内に所在する。これらの遺跡は、黒森山山地の南に続く千徳丘陵の縁辺にあり、閉伊川支流の山口川が丘陵部から低地に達する中流域に所在する。

天神山遺跡は、山口川左岸の標高49～56メートルの丘陵末端に立地し、河川からの比高は約40メートルである。北東側は山口川、南西側は近内地区から山口川に合流する小河川によって開析されており、丘陵末端部は尾根状を呈している。

赤畑遺跡は、天神山遺跡の北北西約250メートルの山口川沿いに位置し、千徳丘陵と山口川の間形成された北東及び南西向きの緩斜面に立地する。調査地点の標高は26～32メートルで、河川からの比高は約7メートルである。山口館跡は山口川左岸の丘陵に構築された城館遺跡で、標高50～120メートルの尾根上に連続的に平場が見られ、基部は空堀で区切られている。



遺跡位置図(1:50,000)

Fig. 1

2 周辺の遺跡

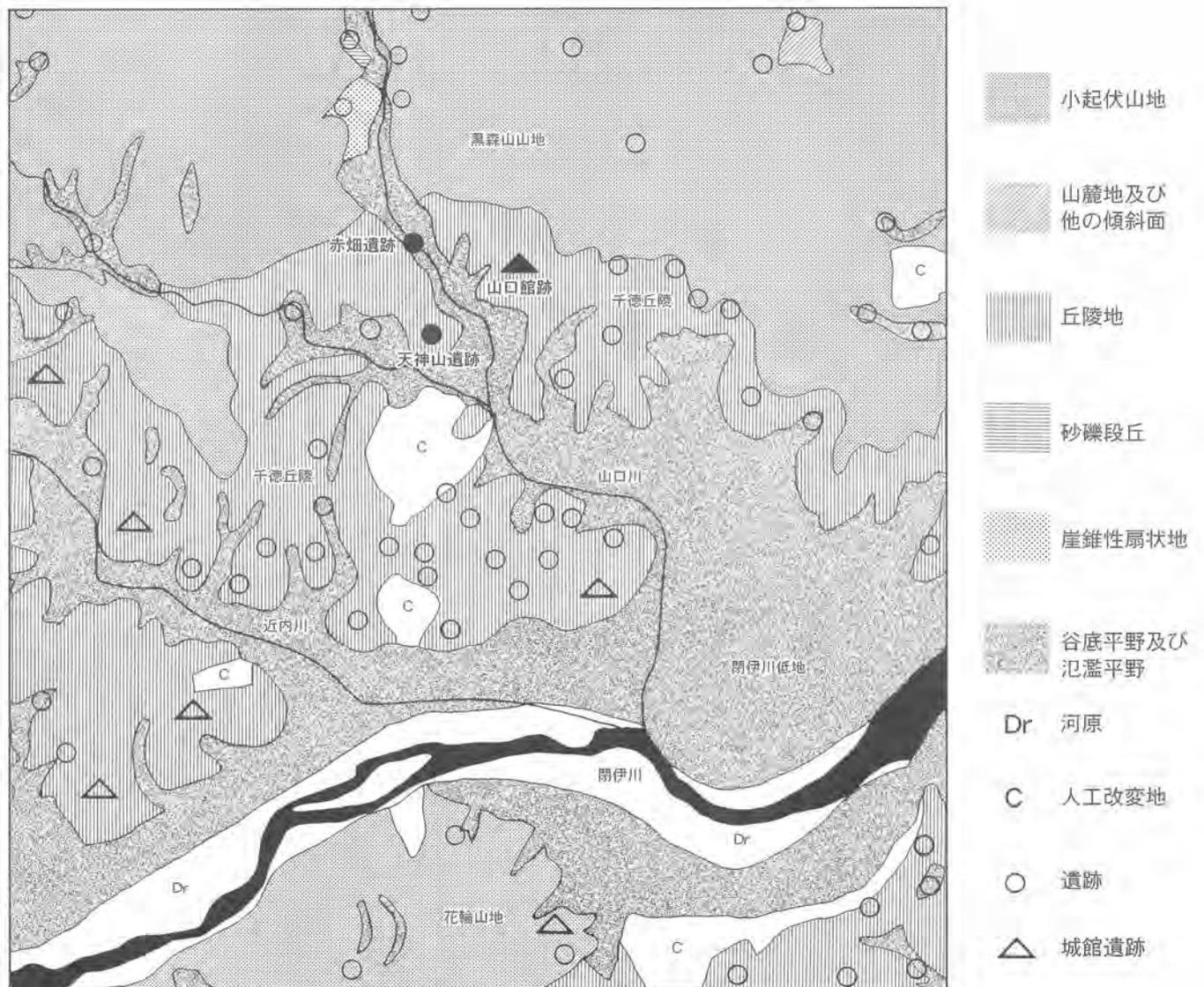
(1) 周辺遺跡の立地

山口川の中流域とその周辺には、縄文時代から中・近世に至る数多くの遺跡が分布している。これらの遺跡の立地は、大きく三類型に分けることができる。

第1は、山口川と丘陵の間に形成された狭小な緩斜面に所在する遺跡である。河川からの標高差は小さく、特に東向き緩斜面に遺物の分布を多く見ることができる。これには、牛沢遺跡・高根遺跡・赤畑遺跡などがあげられ、縄文時代中期に属する遺跡が主体を占める。

第2は、黒森山地および千徳丘陵上に所在する遺跡である。山口川との比高は数十メートルと大きく、河川や低地に面した丘陵上の平坦部には小平Ⅰ遺跡・天神山遺跡など縄文時代の遺跡がある。また、山地に続く尾根上には中世の山口館跡が存在する。

第3は、丘陵から低地に至る緩斜面に所在する遺跡である。背後に丘陵を控え低地や小河川に接する比較的広がりのある立地で、駒込Ⅰ遺跡などがこれにあたる。ここでは縄文時代のほかに、奈良・平安時代の遺物も見られる。



地形区分と遺跡分布図(1 : 25,000)

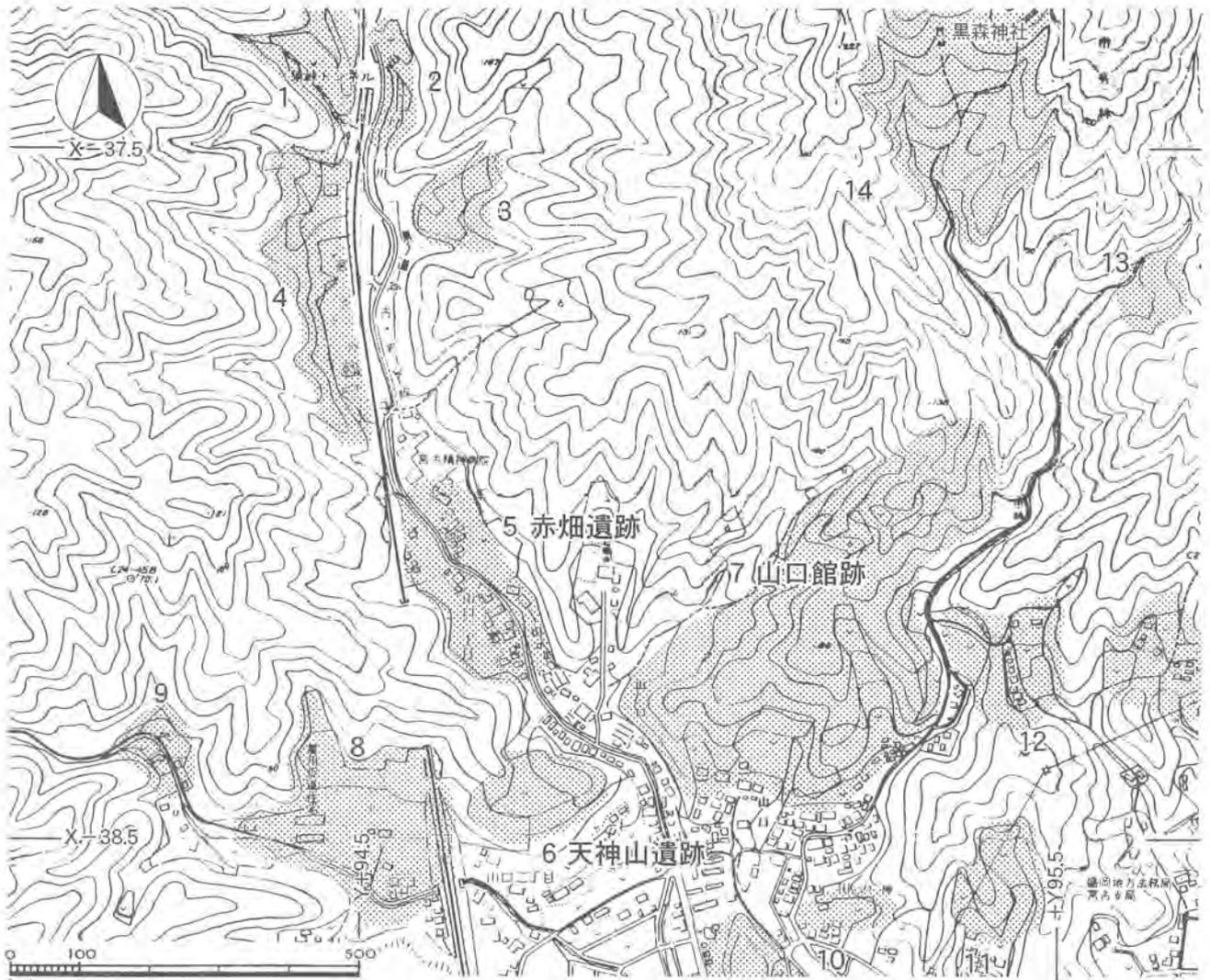
Fig. 2

(2) 周辺遺跡の調査

これまでに報告されている周辺遺跡の調査は、赤畑遺跡、高根遺跡、黒森町 I 遺跡の 3 遺跡で、それぞれ中世、縄文時代中期、近世の遺構が検出されている。

・赤畑遺跡

県道改良工事に伴い、1987・88年の2カ年にわたり岩手県埋蔵文化財センターによって調査が行われている。調査地点は山口川右岸の住宅地背後で、今回の調査区の東に隣接する。調査面積は2,250㎡で、標高26mほどの緩斜面から旧県道に向けて幅10～15m、長さ約70mの範囲が調査された。



周辺の遺跡(1 : 10,000)

Fig. 3

番号	遺跡名称	遺物・遺構	番号	遺跡名称	遺物・遺構
1	牛沢	縄文時代中期・後期土器	8	山口駒込 I	縄文時代・古代土器
2	小平 II	縄文時代土器	9	山口駒込 II	縄文時代・古代土器・鉄滓
3	小平 I	縄文時代中期土器	10	黒森町 I	江戸時代墓壇・掘立柱建物跡・铸造炉
4	高根	縄文時代中期竪穴住居跡・土坑	11	拝殿ヶ沢	縄文時代・古代土器・鉄滓
5	赤畑	縄文時代中期土器・中世竪穴住居跡	12	拝殿峠	縄文時代後期土器
6	天神山	縄文時代・弥生時代・古代土器	13	黒森マギ沢	縄文時代早期土器
7	山口館跡	中世城館・縄文時代・古代土器	14	黒森山	古黒森神社・勾玉

検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑3基、溝跡1条、柱穴群などで、遺物は住居跡の床面から鉄鏃が1点、土坑からは角釘が1点出土している。住居跡は一辺3mほどの方形を呈し、壁際に溝が巡っている。これらのうち1棟については南側に1×1.5mの張り出し部を持ち、地床炉を伴う。時代については他の類例から中世に属するものと考えられている。溝跡、柱穴群からは伴出遺物はなく所属する時期は不詳であるが、柱穴群については掘建柱建物跡の可能性が報告されている。

遺構外の出土遺物は、縄文時代では早期・中期・後期・晩期の土器があり、中期中葉の大木8b式期が主体を占める。また少量ではあるが、弥生式土器と後北式土器が出土している。

・高根遺跡

老人保健施設および社会福祉施設の建設に伴い、1988・91年の2次にわたり宮古市教育委員会によって調査が行われている。調査地点は赤畑遺跡の北約500mの山口川右岸で、標高45～50mの南東向き緩斜面である。調査面積は第1次調査区が1500㎡、その北10mほどの第2次調査区は613㎡である。

検出された遺構は、第1次調査では集石を伴う土坑とフラスコ状土坑が112基、石囲炉2基、第2次調査では竪穴住居跡7棟などがあり、いずれも縄文時代中期の大木7～8式期のものである。遺跡全体からすると部分的な調査ではあるが、標高の高い北側から竪穴住居跡のある居住域、フラスコ状土坑などの貯蔵施設群、集石を伴う土坑群という集落構造が想定されている。

出土遺物は、縄文時代の前期・中期、さらに僅かながら後期の土器がみられるが、主体は中期前葉から中葉の大木7～8式期のものである。また、このほかに珧状耳飾りの欠損品や斧状土製品、土製円盤が出土している。

・黒森町遺跡

宅地造成工事に伴い、1991年に宮古市教育委員会によって調査が行われている。調査地点は山口館の南で、黒森神社の参道入り口に位置し、標高21～28mの丘陵末端部である。調査面積は1,200㎡で、尾根とその南の平坦面を調査対象とした。

検出された遺構は、尾根上から墓壙が19基、平坦面から掘建柱建物跡2棟、鑄造炉2基などである。墓壙は副葬品の年代から17～18世紀、掘建柱建物跡、鑄造炉も18世紀代の所産と考えられている。

出土遺物は、17～19世紀の瀬戸美濃・肥前系陶磁器、鑄型、鉄製品、鉄滓、鉄銭、銅銭などがある。市内では、近世遺跡の調査例はこれまでになく、しかも鉄の鑄造に関する遺跡として特筆される。

《第Ⅱ章参考文献》

岩手県企画開発室 1974 『北上山系開発地域土地分類基本調査』

宮古市 1980 『宮古市の自然』

舘岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989 『赤畑遺跡発掘調査報告書—県道宮古・岩泉線 道路改良工事関連遺跡発掘調査』 同センター報告書第142集

宮古市教育委員会 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』 宮古市埋蔵文化財調査報告書3

宮古市教育委員会 1986 『宮古市遺跡分布図—昭和60年度版』 宮古市埋蔵文化財調査報告書9

宮古市教育委員会 1989 『高根遺跡—昭和63年度発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書19

宮古市教育委員会 1992 『黒森Ⅰ遺跡—平成3年度発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書32

宮古市教育委員会 1992 『高根遺跡—平成3年度発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書33

Ⅲ 調査内容

1 天神山遺跡

(1)位置と立地

天神山遺跡は、宮古市山口第11地割字赤畑2番8・山口二丁目41番2ほかに所在し、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北西約1.8kmに位置する。調査地区は、宮古駅から県道宮古・岩泉線を北上して山口地区センターに至り、ここからさらに北々西250mほどの地点である。

遺跡は千徳丘陵の末端に位置し、調査地区は標高49～56.2mの南向き緩斜面で、河川からの比高は約40mである。遺跡の立地する丘陵は、山口川とこれに西から合流する小河川によって開析され、北東から伸びる尾根状になっている。遺跡の周囲は北東部を除き、河川および低位面に至る急斜面となっており、低位面の標高は15m前後である。

調査前の状況は原野と山林で、原野部分は最近まで畑地として利用されていた形跡があり、調査区南側では落差1.5mほどの段状の部分が見られる。調査対象地区北西部の尾根は山林で、未伐採の状態であった。また、尾根の東端部には天満宮が祀られており、天神山の名称はこれに由来している。遺跡台帳では、縄文時代の遺物と土師器・須恵器の分布が記載されており、地形的にも良好な立地であることから、これらの時期の遺構の存在が予想された。

(2)調査方法と経過

調査座標は地形測量図に明記してある路線中軸線などを基準に、地形等を考慮して任意に設定したもので、座標の南北軸は磁北から5°西に偏する。座標原点を調査地区のほぼ中央に置き、平面位置は原点から南北東西への距離で記録した。

調査は対象地区のうち旧畑地である原野部分について、直行する4本のトレンチを設定して行われた。NSトレンチは、調査地区の最も標高の高い部分から南斜面にかけて南北方向に幅5mで設定され、さらにこれに直行して幅4mのEW-1トレンチ、またこの南に3mの間隔を置いて幅5mのEW-2トレンチを設けた。EW-3トレンチは、調査地区南側の一段低い緩斜面部分の遺構を確認するため、NSトレンチ



遺跡周辺の地形と調査区(1:5,000)

Fig.4

の南端から東西方向に幅5mで設定された。なお、土層断面の記録はNSトレンチの西側とEW-1トレンチの北側で行っており、基本土層確認のためのテストピットもこの面に設けた。調査はこれらのトレンチ内の遺構・遺物の在り方を確認することから始められた。

調査期間は平成6年7月20日から11月18日までの59日間で、794m²を調査している。調査区内の草木除去、トレンチ設定、表土除去作業がほぼ24日間、遺構検出作業が13日間、遺構精査・実測作業に22日間を要した。遺物、遺構の検出状況などから、調査範囲をトレンチ内に止め調査を終了することとした。なお、遺跡略号はTJ-94とし、発掘調査・資料整理にあたりこの略号を用いた。

(3)基本層序

基本層序は、EW-1トレンチのほぼ中央とNSトレンチ南端部の2地点で確認している。テストピット-N(TP-N)は標高53.4m付近の東西面、テストピット-S(TP-S)は標高51.9mの南北面で記録した。

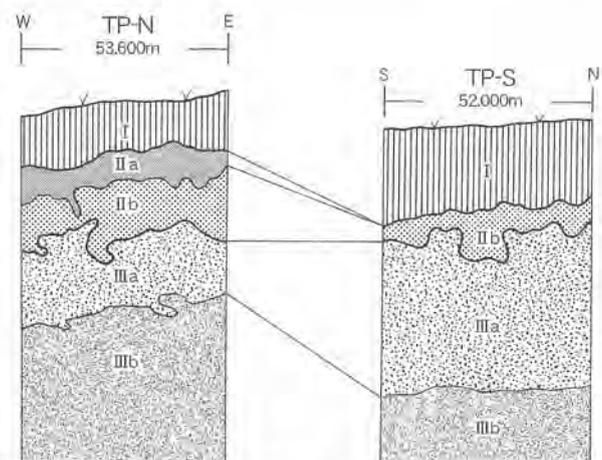
I 層 暗褐色壤土(10YR3/3L)を基本土とし、褐色壤土(10YR4/6L)ならびに黒褐色壤土(10YR2/2L)が各々2~3%ほど粉状に混入している。層厚は20~30cm、軟質で締まりは弱く粘性も弱い。調査区全面に見られ、耕作土および耕作に伴い移動した攪乱性の土層である。

II a 層 黒褐色シルト質埴壤土(10YR2/2SiCL)を基本土とし、褐色シルト質壤土(10YR4/6SiL)が1%粉状に混入している。層厚は10~15cmで、I層に比べやや硬く締まっており、粘性は弱い。第I層との層理面は、不規則な凹凸を成し、層理は明瞭に識別される。この層はEW-1トレンチ西半の北側に部分的に見られるもので、遺物を含んでいる。

II b 層 黒褐色シルト質埴壤土(10YR2/2SiCL)を基本土とし、褐色シルト質壤土(10YR4/6SiL)を7%粉状、また黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を20~30%粒塊状に混入しており、層の下位で混入率が高い。層厚は20~30cm、硬さはII a層と同様で粘性はこれよりやや強い。II a層との層理面には、小さな凹凸や木根状の入り込みが見られる。

III a 層 黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を基本土とし、褐色壤土(10YR4/6L)を2%粉状に混入する。層厚は30~60cm、II b層よりやや硬く粘性はこれよりやや強い。II b層との層理面には、不規則な凹凸や木根状の入り込みが見られる。

III b 層 黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)のほぼ純層で、硬く締まりがある。III a層との層理面は、木根状の入り込みが見られ、TP-Nではやや西に傾斜している。



基本土層図(1:30)

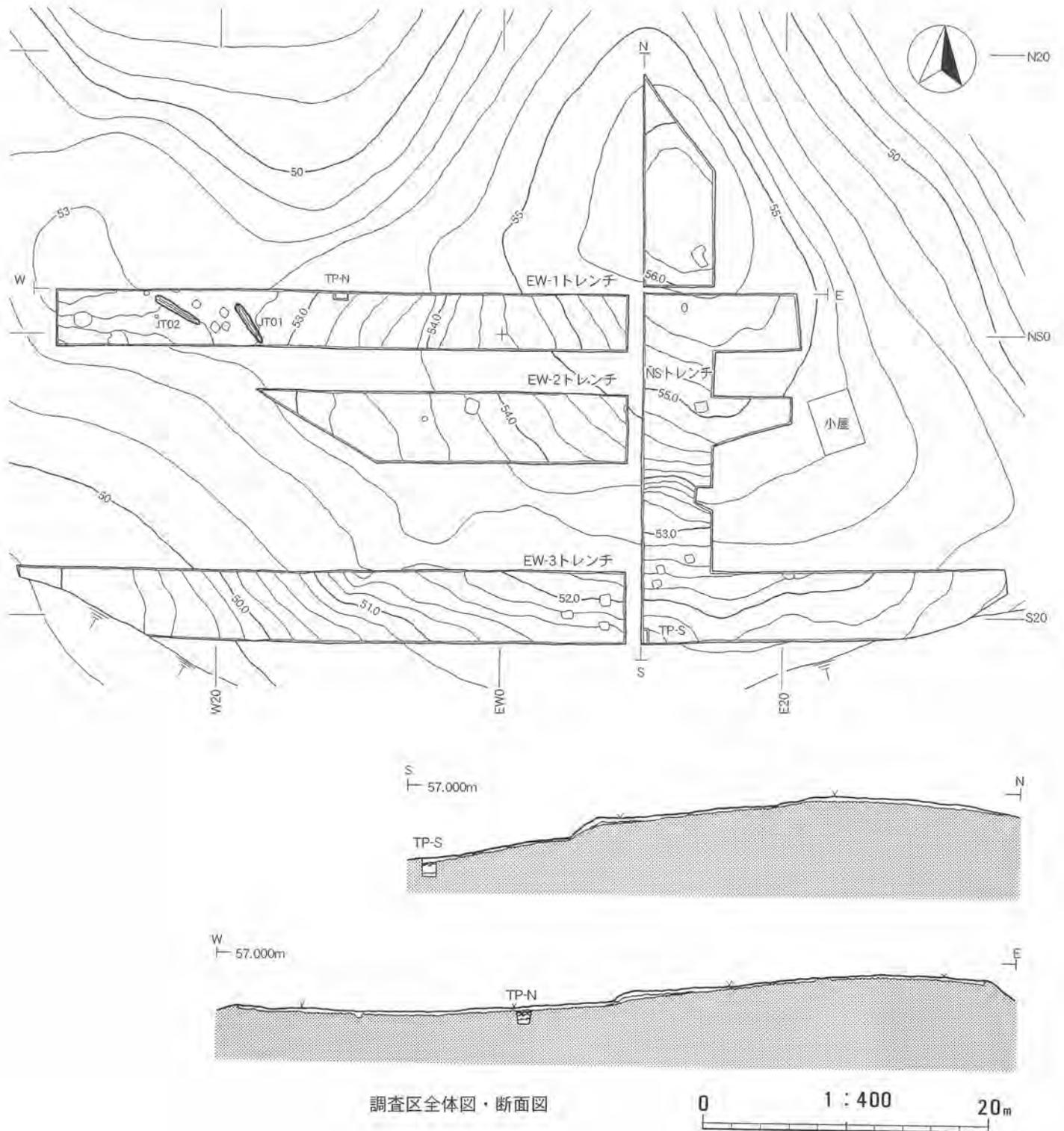
Fig. 5

(4)検出遺構

遺構の検出は、I層を除去後、EW-1トレンチの北西部ではII a層を、その他の部分ではII b層を徐々に削りながら行われた。調査区内ではII a層の堆積は部分的で層厚も薄く、II b層上面で遺構の有無の確認を行った。段状の部分では盛土層が見られたが、これについても遺物の有無等を確認しながら

これを除去し、旧地形の状況を検出した。

表土直下では、方形または不整形の土坑が20基検出された。これらは調査区内で散発的に分布しているが、南端部の中央と北西部にやや集中する。一部の土坑について半截し内容を確認したところ、埋土にビニールなどが含まれ、近來の耕作時に掘られた攪乱坑であることがわかった。その他のものについても埋土や混入物、平面形状の共通性から同様の攪乱坑と判断されたため、これらについては平面形状の記録のみに止めた。



調査区全体図・断面図

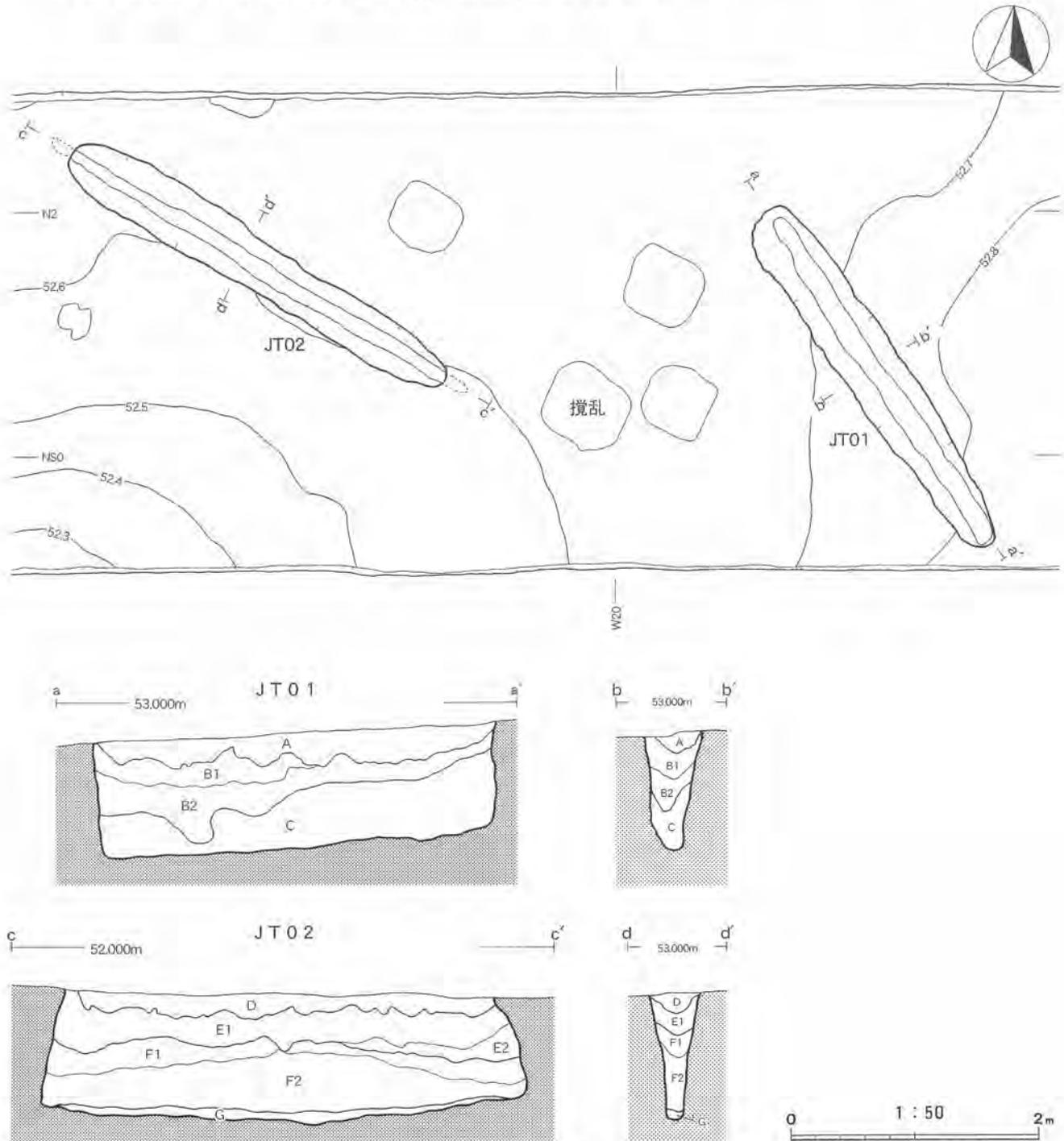
0 1 : 400 20m

Fig.6

EW-1トレンチの西半部からは、陥し穴状遺構が2基検出されている。遺構の周辺は、北西方向から丘陵末端（最高位標高56m）に至る尾根の鞍部となっており、その南西及び北東側はやや急な斜面となっている。鞍部の標高は51mで、この尾根線上で最も低く、尾根の幅も両側の斜面の入り込みによって狭くなっている。

検出地点は尾根鞍部の東端にあたり、標高は52.6～52.8mでやや平坦である。南北は丘陵下に続く斜面、東は丘陵末端に至る緩斜面となっている。

遺構の検出面はⅡb層上面で、Ⅰ層除去後の検出作業で黒褐色土の落ち込みとしてプランが確認された。遺構の北東側には黒褐色で遺物を含むⅡa層が見られる。この層はトレンチ北側の斜面上端部に薄く堆積しているもので、遺構部分では面的に存在しない。



陥し穴状遺構(JT01・02) 平面図・土層断面図

Fig.7

第1号陥し穴状遺構(JT01)は、検出面での長さが328cm、最大幅は50cmの溝形を呈し、深さは86～96cmである。底面は長さ316cm、最大幅19cmで、北西方向に傾斜しておりレベル差は28cmとなっている。また底面に小ピットは見られなかった。

遺構の長軸方向は磁北から38°西に偏し、等高線との関係は、52.7及び52.8mの等高線を平均化した方向から56°を示し、等高線にたいして半直角以上の角度をもつ。また尾根線を等高線と直角方向と見なすと尾根線との角度は34°となる。

底面からの立ち上がりは、両端部では垂直からやや外傾してほぼ直線状に上端部に至り、両側部は、底面近くでやや不規則な立ち上りを示すが、全体にはほぼ外傾して開口部に至る。

埋土は三層に大別される。A層は黒褐色のシルト質埴壤土層(10YR2/2SiCL)で、褐色シルト質壤土(10YR4/6SiL)を粉粒状に3%含む。この層は近辺に見られるII a層と同一の土層と考えられ、遺構埋没の最終段階で堆積したものである。

B層は暗褐色のシルト質埴壤土(10YR3/3～3/4SiCL)を基本土とした層で、混入土の差異によって二層に細分される。B1層は褐色シルト質壤土(10YR4/6SiL)を5%、黒褐色シルト質埴壤土(10YR2/2SiCL)を3%、いずれも粉状に含む。B2層は黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を3%粉状に含んでいる。

C層は黄褐色のシルト質壤土層(10YR5/8SiL)で、暗褐色シルト質壤土(10YR3/4SiL)を1%粉状に含む。この層は基盤土と色調がかなり類似しており、遺構底面は基盤土との硬さの差異によって識別された。いずれの層も軟質で炭化物・礫などの混入はなく、伴出遺物もなかった。

第2号陥し穴状遺構(JT02)は、JT01の西方約2.7mの位置に検出された。検出面での長さが356cm、最大幅は50cmの溝形を呈し、深さは82～106cmである。底面は長さ396cm、最大幅16cmで、中央がやや窪んでおり、そのレベル差は24cmとなっている。また底面に小ピットは見られなかった。

遺構の長軸方向は磁北から64°西に偏し、等高線との関係は、52.6mの等高線にほぼ平行し、尾根線とも同様の関係にある。

底面からの立ち上がりは、両端部では内傾してほぼ直線状に上端部に至り、底面端部は上端部より各々20cm入り込んでいる。両側部は、底面近くではほぼ垂直に立ち上がり箱状の断面を呈し、中位より上はやや外傾して開口部に至る。

埋土は四層に大別される。D層は黒褐色のシルト質埴壤土層(10YR2/2SiCL)で、黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を粉粒状に2～3%含む。この層はII a層と基本土を同一とする土層とみられ、遺構埋没の最終段階で堆積したものである。

E層は褐色ないし暗褐色のシルト質壤土層(10YR3/4～4/4SiL)で、二層に細分され、いずれも黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)が混入している。E1層は褐色シルト質壤土(10YR4/4SiL)を基本土とし、黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を7%粉状に含み、E2層は暗褐色シルト質壤土層(10YR3/4SiL)を基本土とし、黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を2%粉状に含んでいる。

F層は黄褐色のシルト質壤土層(10YR5/8SiL)で、二層に細分され、F1層は褐色シルト質壤土(10YR4/4SiL)を1%粉状に含む。E2層には暗褐色シルト質壤土(10YR3/4SiL)が1%粉状に含まれる。

G層は暗褐色シルト質埴壤土層(10YR3/4SiC)で粘性がやや強く、黄褐色シルト質壤土(10YR5/8SiL)を2%粒状に含んでいる。いずれの層も軟質で炭化物などの混入はなく、伴出遺物もなかった。

(5) 出土遺物

調査区内で出土した遺物は、土器片26点、フレーク1点、陶磁器3点、銭貨1点などで、遺構に伴う遺物はない。陶磁器は近現代及び時期不詳の小片で、銭貨は明治10年の半銭銅貨である。これらはいずれもEW-1トレンチのI層中から出土している。

土器については全て細片の状態出土したもので、出土地点は調査区の西半に偏っている。特にWE-1トレンチの西半部に分布が集中しており、全体の約7割の18点がここから出土している。層位はI層、II a層及び遺構検出面（II b層上面）からの出土である。

Fig.8の1～3は交互刺突文をもつ土器である。1は沈線幅2mm、間隔1～2mmのやや浅い二条の平行沈線上に、径3mmの中実の刺突具で施文したもので、刺突方向は器面に対してやや斜めで、刺突位置は顕著ではないが上下に交互している。器厚は5～7mmで、沈線部分でやや厚くなり僅かに屈曲する。2は沈線幅2mm、間隔約5mmの二条の平行沈線の間径3mmの中実の刺突具で施文したもので、刺突位置は上下に交互している。この平行沈線から幅10mmの地文部分を隔て、同様の沈線・刺突が施されているのが破片端で観察される。器厚は4～5mmで、やや湾曲する。3は細片であるが2と同様の平行沈線・刺突文が施されている。4～9は縦位の撚糸文が施された胴部破片である。これらの土器は、交互刺突文、縦位の撚糸文などの特徴から弥生時代後期に位置づけられるものと考えられる。

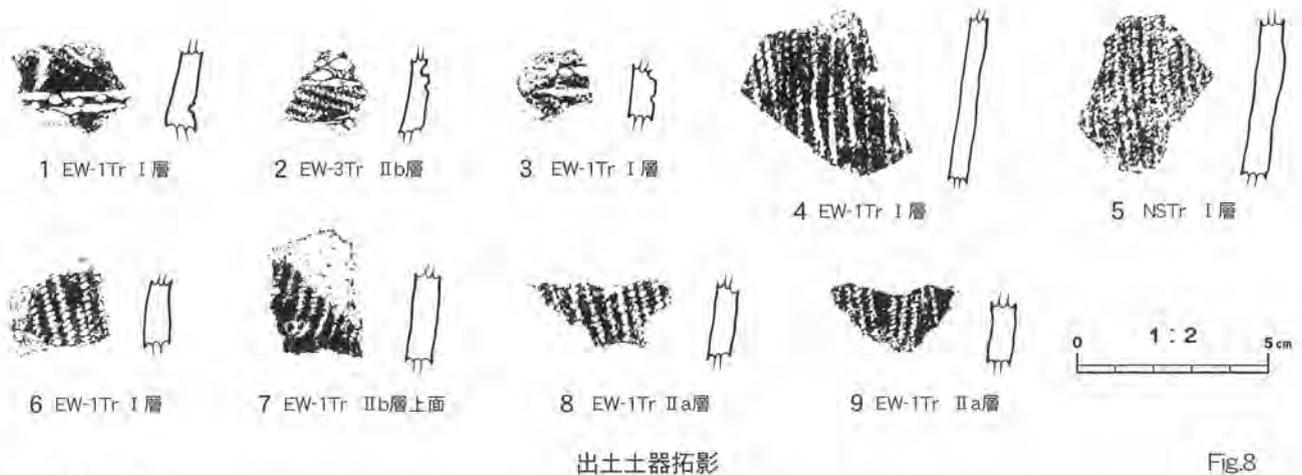


Fig.8

(6) まとめ

天神山遺跡は、表採資料などから縄文時代または古代の遺構が検出されることが予測されたが、調査の結果は、陥し穴状遺構2基と弥生時代後期の遺物を確認するのみであった。

検出された2基の陥し穴状遺構は、伴出遺物がなく構築時期を判断するには至らなかった。これら2基の遺構の時期関係は、埋土状況が示すように共通する黒褐色土を最終埋没土としていることから、ほぼ同時期と考えられる。また、埋土最上位の黒褐色土は、弥生時代後期の土器を含むII a層と同一とみられることから、遺構構築は弥生時代以前であり、II a層が堆積する時点で遺構は完全に埋没していない状況であったといえる。陥し穴状遺構は、いわゆる溝形といわれる類型のものである。市内では弘川I遺跡で4基、長根I遺跡で3基、青猿I遺跡で4基検出されているが、いずれも伴出遺物が乏しく詳細な時期を決定するには至っていない。

弥生時代後期の遺物は天王山式期に属するものであり、近辺に当該時期の遺構が存在する可能性が考えられる。市内では長根I遺跡、花原市遺跡、及び大付遺跡で天王山式、赤穴式の調査例がある。

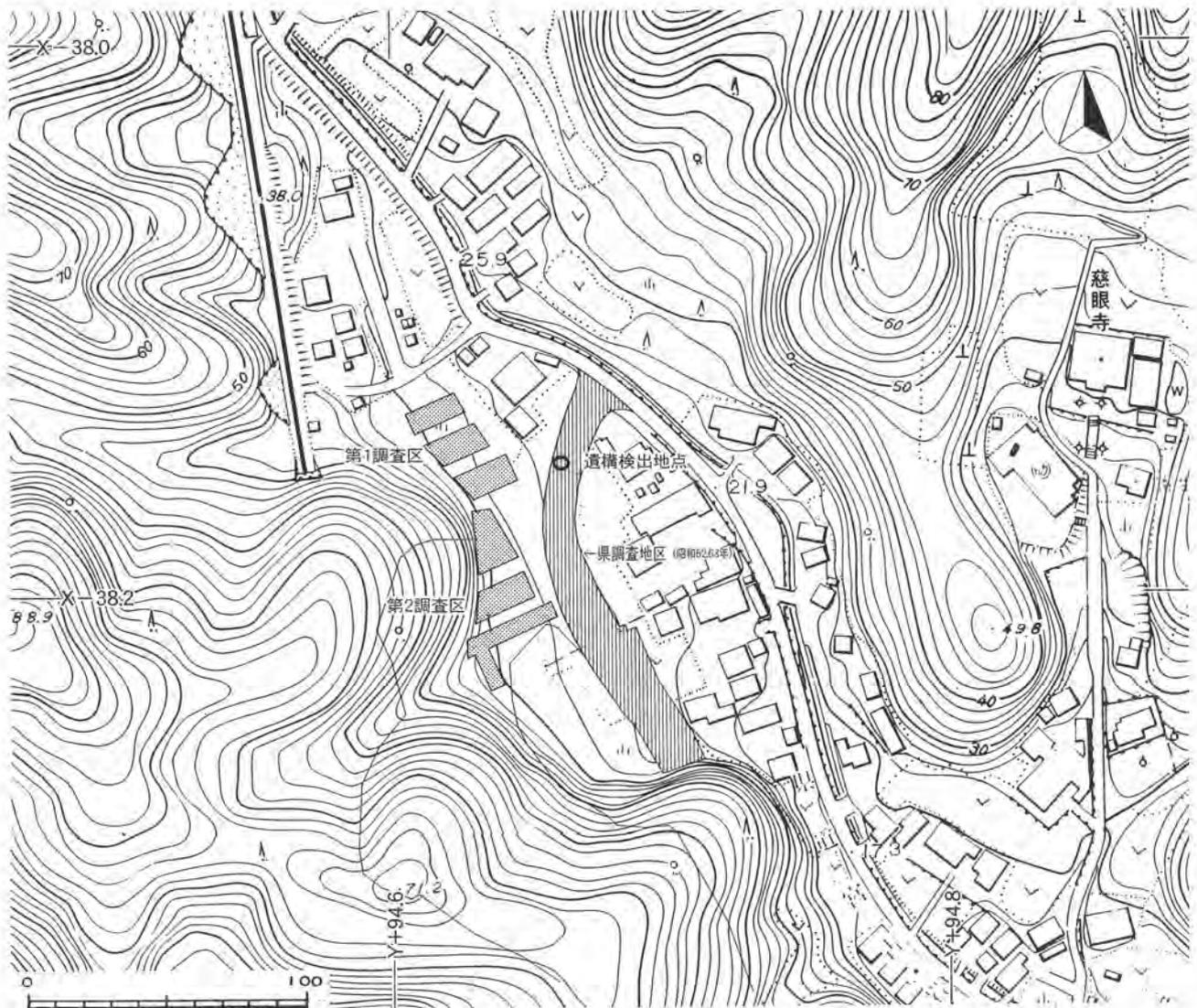
2 赤畑遺跡

(1)位置と立地

赤畑遺跡は、宮古市山口五丁目8番ほかの所にあり、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北西約2kmに位置する。調査地区は、宮古駅から県道宮古・岩泉線を北上して山口地区センターに至り、ここからさらに北々西500mほどの地点である。

遺跡は山口川中流域の右岸にあり、千徳丘陵と河川の間に見られる北東向の緩斜面に立地する。山口川は黒森山山地から南流する小河川で、山地・丘陵を開析し狭小な谷底平野を形成しながら低地に至り、遺跡から2kmほど下流で閉伊川と合流する。調査地区の標高は26～32mで、河川からの比高は約7mである。

調査前の状況は南半部が原野、北半部は駐車場で、いずれもかつては畑地として利用されていた地域である。調査区東側には県道宮古・岩泉線が通っており、この工事に際して昭和62・63年には岩手県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている。この調査では、中世の竪穴住居跡・縄文時代中期の遺物などが確認されており、今次調査区でもこれらの時期の遺構・遺物が存在することが予想された。



遺跡周辺の地形と調査区 (1 : 2,500)

Fig.9

(2)調査方法と経過

調査座標は地形測量図に明記してある路線中軸線などを基準に、地形等を考慮して任意に設定したもので、座標の南北軸は磁北から24°西に偏する。座標原点を調査地区のほぼ中央に置き、ここから南北東西への距離で平面位置を記録した。

調査対象地域のうち北半部の駐車場部分を第1調査区、南半の原野部分を第2調査区とし、各調査区にトレンチを設定して調査を行った。第1調査区では5m間隔で幅8mないし10mのトレンチを3本座標に対応して設定し、北からA、B、Cトレンチとした。土層断面の記録はBトレンチの北側で行った。第2調査区では北からDトレンチ、その南に5mの間隔を置いて幅10mのEトレンチ、さらに5m南に座標に対応してL字状に直行する幅5mのFトレンチ(F-EWTr. F-NSTr.)を設定し調査を進め、土層の堆積状況はF-EWトレンチの北側で記録した。

調査期間は平成7年9月28日から11月24日までの40日間で、第1・第2調査区の1,180㎡を調査している。発掘は第2調査区の南側から始められ、ここではトレンチ設定、表土除去作業がほぼ8日間、遺構検出作業が6日間、実測作業が8日間、さらに埋戻しに2日間の24日を要した。第1調査区は駐車場として使われていたため砕石が敷かれており、これの除去のため重機を用いた。作業はトレンチ設定、表土除去がほぼ4日間、遺構検出が7日間、実測が5日間で、16日を要し、調査を終了した。なお、遺跡略号はAB-95とし、発掘調査・資料整理にあたりこの略号を用いた。

(3)基本層序

堆積土層については、耕作などにより削平されて本来の堆積土を欠いている部分もみられるが、ここでは土層の遺存状況が比較的良好なBトレンチ北面の中央よりやや西の部分と、F-EWトレンチの谷状部分のほぼ中央の2地点について示した。

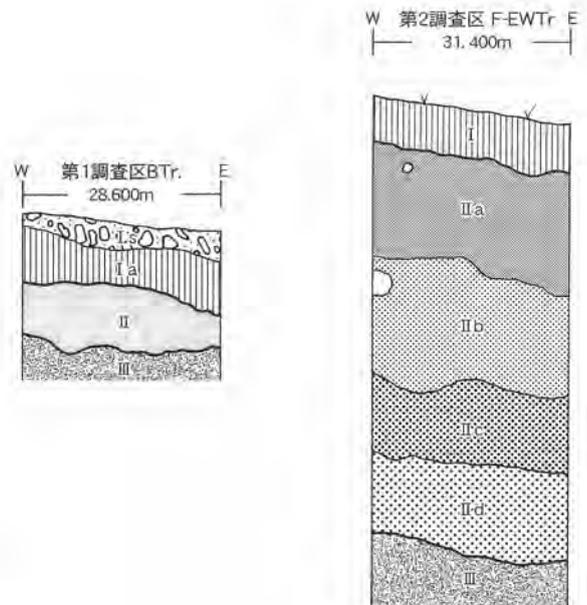
〈第1調査区〉

I s 層 砕石層で、駐車場にするために敷かれたものである。この調査区の全面にみられ層厚は5~20cmである。

I a 層 旧表土で、黒褐色砂壤土(10YR2/3SL)に黒褐色壤土(10YR2/2L)及び暗褐色砂壤土(10YR3/4SL)を各々1%粉状に含む。また、花崗岩の白色粒砂・細礫を3%含む、近現代の塵芥を混ざる。畑地として使われていた時期の耕作土で、この層から肥料穴と思われる多くの攪乱坑が掘り込まれている。層厚は10~20cmで、極めて硬く締まっており粘性も弱い。

II 層 黒褐色壤土(10YR2/2L)を基本土とし、やや明るい黒褐色壤土(10YR2/3L)を1%粉状に含む。また、花崗岩の白色粒砂・細礫を1~3%含む。層厚は10~40cm以上、やや軟質で粘性はI a層に比べやや強い。I a層との層理面はやや不規則な凹凸があるが、層理は明瞭に識別される。この層には遺物が含まれ、特に上位に多い。

III 層 褐色砂壤土(10YR4/6SL)を基本土とし、黒褐色壤土(10YR2/2L)を5%粉粒状に混入する。



基本土層図(1:30)

Fig.10

層厚は10～20cm、Ⅱ層よりやや硬く粘性はこれより弱い。Ⅱ層との層理面は、不規則な凹凸や木根状の入り込みが見られる。この層には遺物は含まれない。

〈第2調査区〉

- I 層 暗褐色砂壤土(10YR3/4SL)を基本土とし、黄褐色砂壤土(10YR5/6SL)及び暗褐色砂壤土(10YR3/3SL)を2%各々粉粒状、粉状に混入する。また、花崗岩の白色粒砂・細礫・礫を3%含む。層厚は10～20cm、軟質で締まりは弱く、粘性も弱い。調査区全面に見られ、耕作土ならびに耕作に伴い移動した攪乱性の土層である。
- Ⅱ a 層 黒褐色砂壤土(10YR2/3SL)を基本土とし、暗褐色砂壤土(10YR3/3SL)が1%粉状、黒褐色砂壤土(10YR2/2SL)が2%粉状に混入している。花崗岩の白色粒砂・細礫・礫を5%含む。層厚は最大で50cmで、Ⅰ層に比べやや硬く締まっており、粘性は同様である。第Ⅰ層との層理面は不規則な凹凸を成し、層理は明瞭に識別される。この層では最上面から縄文時代後期の土器、また層中からは石鏃が1点出土している。またこの層は堆積状況などから第Ⅰ調査区のⅡ層に対応するものとみられる。
- Ⅱ b 層 黒褐色砂壤土(10YR2/3SL)を基本土とし、暗褐色砂壤土(10YR3/3SL)が2%粉状、黒褐色砂壤土(10YR2/2SL)が1%粉状に混入している。花崗岩の白色粒砂・細礫を3%含み、10～30cmほどの礫が多くみられる。層厚は最大で50cmで、硬さ・締まり・粘性は上層と同様である。Ⅱ a 層と類似した土層で、これらの識別は主に花崗岩の白色砂礫の混入の多寡に拠った。なお、遺物は含まれていなかった。
- Ⅱ c 層 黒褐色壤土(10YR2/2L)を基本土とし、黒褐色砂壤土(10YR2/3SL)を3%粉状に含む。花崗岩の白色粒砂・細礫を2%含み、10cm前後の礫も混入している。谷状部分にレンズ状に堆積しており、層厚は最大で30cmで、硬さ・締まりは上層と同様である。Ⅱ b 層より土色がやや暗く、砂質も弱く花崗岩砂礫の混入がやや少ないことから分層した。またこの層にも遺物はみられなかった。
- Ⅱ d 層 黒褐色壤土(10YR2/2L)を基本土とし、暗褐色砂壤土(10YR3/4SL)を2%粉状に含む。混入土は下位に多く含まれる。花崗岩の白色粒砂・細礫を2%含み、巨礫もみられる。層厚は20～50cmで、硬さ・締まり・粘性はⅡ c 層とほぼ同様である。また遺物は出土しなかった。
- Ⅲ 層 褐色砂壤土(10YR4/6SL)を基本土とし、暗褐色砂壤土(10YR3/4SL)が2%粉状に含まれる。やや硬く締まっており礫を含む。

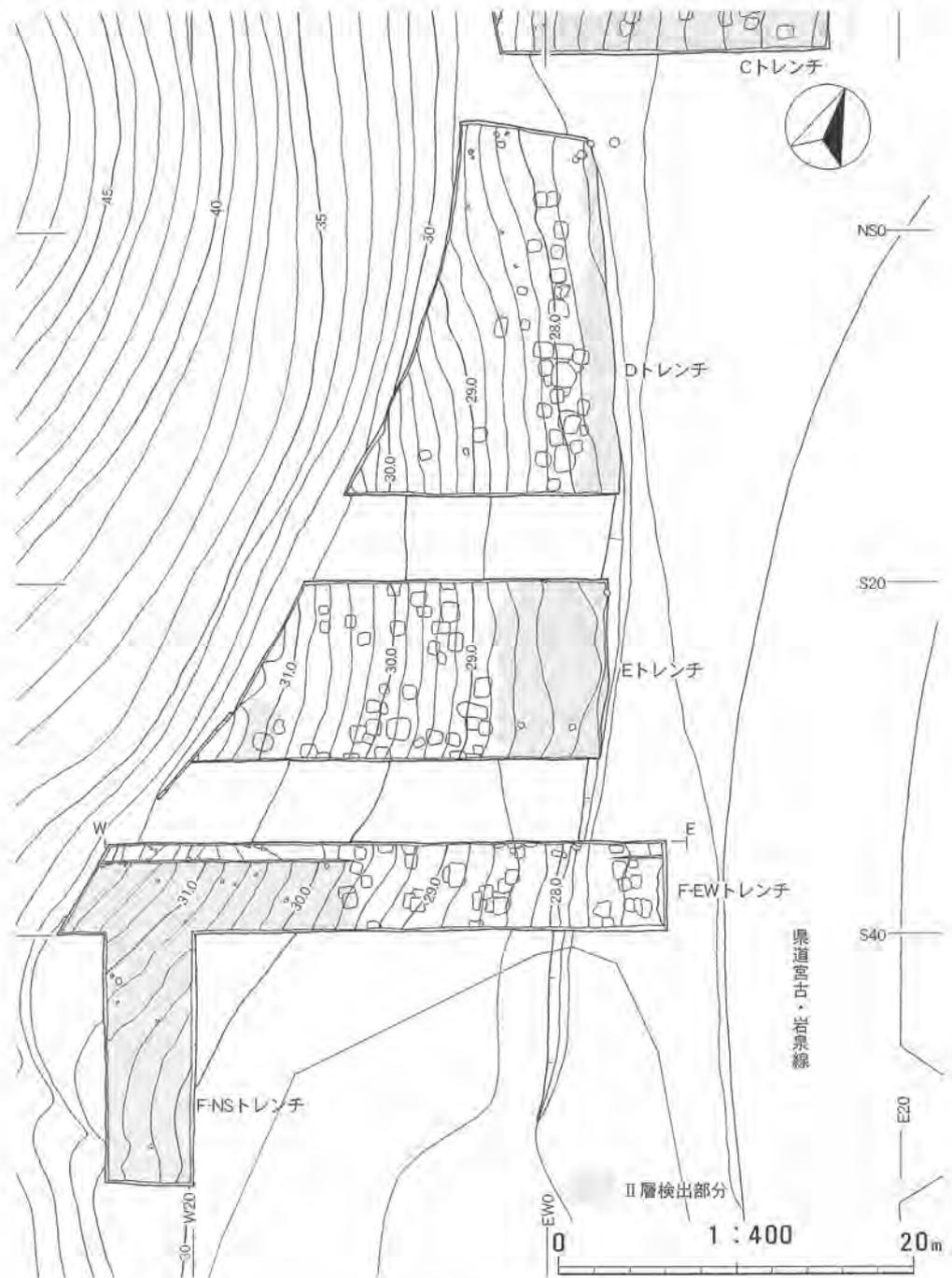
(4)検出状況

〈第1調査区〉

遺構の検出は、碎石層・旧表土層を重機で除去し、Ⅱ層上面からこれを徐々に削りながら行われた。旧表土の直下では方形または長方形の土坑が、トレンチ内で120基ほど検出された。これらは調査区内に満遍なく分布しており、重複しているものもみられた。土坑の規模は50cm～1m前後で、方形のものが多く、一部の土坑については半截し、またBトレンチ北側の土層断面でこれらの掘込み面を観察したところ、埋土は軟質でビニールなどを含み、旧表土中から掘込まれていることが確認された。したがってこれらの土坑は、近來の耕作時に掘られた肥料穴、または塵芥穴などの攪乱坑であることがわかった。その他のものについても埋土や混入物、平面形状の共通性から同様の攪乱坑と判断され

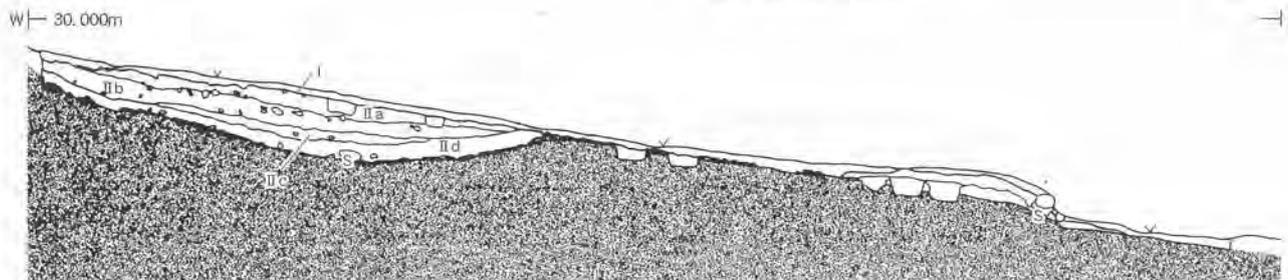
丘陵下に至る浅い谷状の窪みとなり、ここに黒褐色土のII層が自然堆積したものであることがわかった。

この調査区ではII層が遺存している部分が少なく、遺物分布も希薄であり、縄文時代の遺物では上記のほかに石斧の欠損品が1点あるのみであった。



第2調査区平面図

Fig.13



第2調査区土層断面図 (1:200)

Fig.14

(5)出土遺物

出土した遺物は、縄文時代中期、後期、晩期の土器、石鏃、石斧、フレーク、土師器、陶磁器、鉄滓、羽口などである。遺物の分布はA・Bトレンチに多く、このⅡ層黒褐色土から出土した縄文時代の遺物が主体を占め、C～Fトレンチでは散発的で出土量も少ない。

1は幅2mmほどの縦位の直状沈線で無文帯と地文部分を区画したもので、地文はRL単節斜縄文、器厚は5～6mmである。2は口縁部破片で、無文帯と地文部分を幅3～4mmの浅い弧状沈線で区画しており、地文はRL単節斜縄文、器厚は4～5mmである。3は幅5mmほどのかかなり浅い沈線で縄文帯を区画し、入組んだ文様帯を成す。地文はLR単節斜縄文、器厚は7～9mmである。1～3はA、BトレンチのⅡ層から出土したもので、いずれも縄文時代中期後半に属し、1、2は大木9式、3は大木10式に相当する。

4～6はF-EWトレンチのⅡa層検出面から一括して出土したもので、同一個体の破片である。口縁は大波状を成し、幅4～5mmの沈線を三条一組とし、横位に入組んだ無文帯で文様を構成している。沈線の交点には径5mmの円形刺突文がみられ、沈線間には縄文が残る。これらの土器は縄文時代後期前葉の十腰内I式期に属するものと考えられる。

7、8はBトレンチのⅡ層から出土したもので、底部から体部にかけての破片である。底径は70mmほどで、器形は浅鉢と推定され、縄文時代晩期中葉の大洞C1式とみられる。

9～11は網代痕のある底部破片で、A、BトレンチのⅡ層から出土している。9は2～3mm幅の細長い素材を経緯に一本越え、一本潜りで組み、網代編みとしたものである。10は9と同様に編まれた網代である。素材の幅は3mmで経の欠落がみられ網代編み端部の圧痕と考えられる。11は網代痕がやや不明瞭であるが、9と同様の網代編みとみられる。底径は87mmほどである。

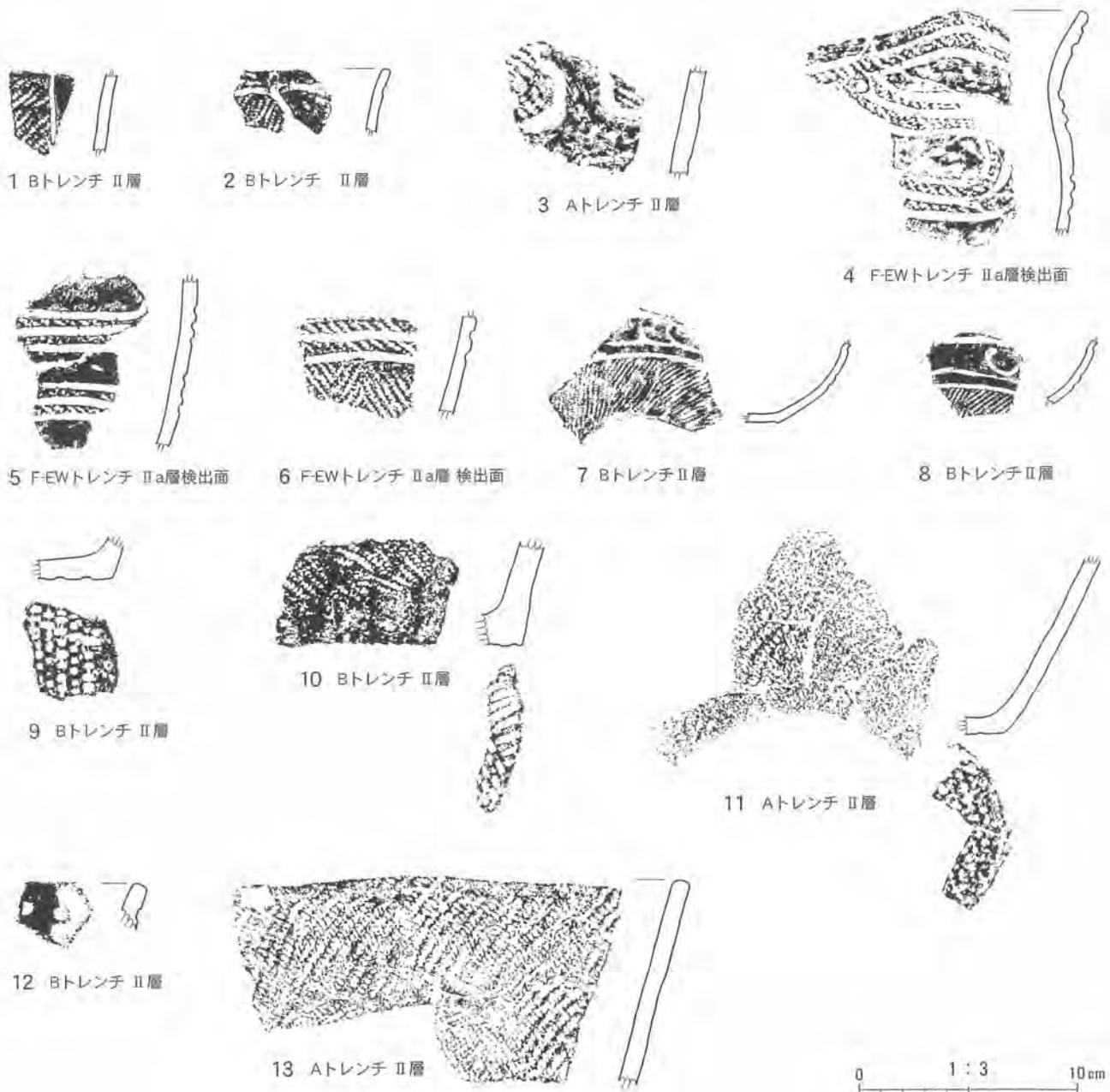
12は円形刺突文をもつ口縁部破片で、無文帯に直径5mmの中実の円形刺突具で施文している。13は粗製の深鉢土器の口縁部破片で、推定口径は36cmほどである。地文はLR単節斜縄文で、器厚は6～7mm、胎土には白色粒砂を含む。

14は磨製石斧の刃部欠損品で、現存長58.1mm、幅30.8mm、厚さ15.8mm、重さ32.8gである。15は小型の磨製石斧で、刃部はやや片刃状で上端も刃部状を成す。長さは41.4mm、幅20.3mm、最大厚7.9mm、重さは12.3gである。一部に剥離痕を残すが全面研磨されている。16は縦長平基の石鏃で長さ32.5mm、基部幅11.4mm、最大厚3.7mm、重さは1.6gである。

(6)まとめ

調査の結果、縄文時代中期、後期、晩期の遺物と、これらの遺物を含む包含層が確認された。また古代に属する遺物も少量ながら出土している。周辺の調査状況などから縄文時代ないし中世の遺構の存在が予想されたが、今次の調査ではこれらの遺構を確認するには至らなかった。各調査区で見られるように、現況地形とは異なる基盤土の起伏があり、その凹部に黒色土が堆積し、第1調査区ではこれが遺物包含層となっている。包含層は調査区外にも広がっており、包含層の遺物には縄文時代中期と晩期の遺物が含まれることから、これらの遺物をもたらした人々の遺構が近辺に所在する可能性は高いと考えられる。

1988年の調査では、今次調査区の東に位置する山口川に近い地点で中世の竪穴住居が検出されており、この時期の遺構は、現在住宅地となっている川沿いの部分に存在する可能性も考えられる。



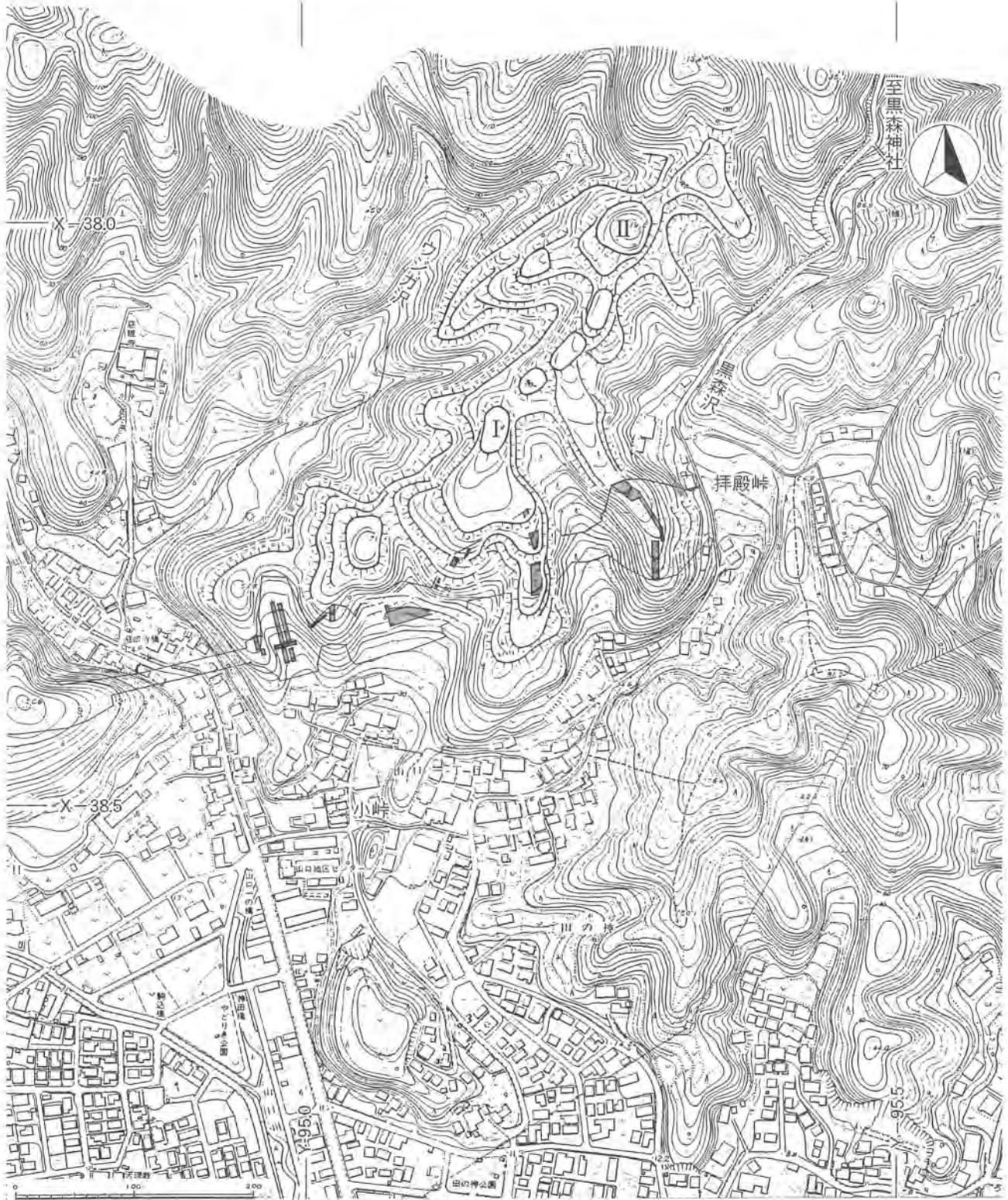
出土遺物

Fig.15

2 山口館跡

(1) 立地と遺跡の概要

山口館跡は、宮古市山口第5地割字久保ほかに所在し、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北西約1.8kmに位置する。調査地区は、宮古駅から県道宮古・岩泉線を北上して山口地区センターに至り、ここからさらに北々東200mほどの地点である。



山口館跡と調査地点 (1:5,000)

Fig.16

館跡は山口川中流の左岸にあり、背後の黒森山山地から続く千徳丘陵の縁辺部に立地する。黒森沢とウジガ沢に挟まれた尾根上に山口館は構築され、北東部は標高120mほどの地点の空堀で区切られており、ここから南西に下る尾根筋に連続的に平場がみられる。遺跡の西端は丘陵末端の山口川に面する急斜面で限られ、標高差約70m、延長600mほどの範囲に縄張りが認められる。また、丘陵の南200mほどの位置には島状の小山がみられるが、かつては山口地区センター付近の小峠と呼ばれる鞍部を経て丘陵に接続しており、頂上部は平坦になっている。したがってこの部分についても、山口館に関連する遺構の存在が考えられる。

標高110～120mと80～90mの位置には比較的規模の大きな平場Ⅰ、Ⅱがみられ、これらが館跡の中核的機能をもつ部分と考えられる。これに続く尾根には付属する平場が階段状に設けられ、平場Ⅰ、Ⅱの間には、堀で区切られたやや小規模な平場が連続的に形成されている。館跡の北西側には、連続して帯状の平場がみられ、最高位の堀切りから山口川に面する急斜面まで続いている。

構築年代、構築者は不詳であるが、関連する史料としては、拝殿峠付近にあったといわれる安泰寺の貞治4年(1365)鐘銘に「大旦那、式部大夫源長時」とあり、また黒森神社に伝えられる文明17年(1485)銘の権現様(獅子頭)には「旦那源行康勝、小笠原左馬助」と記されている。

山口館跡の北には標高310mの黒森山がある。ここは古くから修験の行場であったと考えられており、山中には黒森神社が祀られている。黒森神社には上記の権現様のほかに歴代の獅子頭が伝えられており、最も古いものは南北朝時代(14世紀)の製作と推定されている。また、館跡の1kmほど南には永和2年(1376)建立の「一石一字経塚の碑」がある。

(2)調査方法と経過

北部環状線道路は、山口川右岸の丘陵上から橋梁を経て対岸に渡り、山口館跡の南部分の尾根及び緩斜面を東西に貫く位置に路線が通る。調査対象地域は東西に約400m、幅25～90mの範囲で、現況はほぼ全域山林である。

調査地域の地形は、西から山口川に面する急斜面上の狭小な尾根部分、この東の谷状の洞部分を経て尾根先端部、そして旧畑地とみられる南向き緩斜面となる。さらに館跡の中核部分のひとつと考えられる平場Ⅰとこれに付属する平場がある尾根を横断し、その東の谷と尾根部分を経て、黒森神社への参道に至る斜面となる。

調査は、これらの地域内の遺構・遺物の所在・範囲等を確認し、本調査の実施に備えることを目的としたもので、各地区の地形状況を考慮して試掘トレンチを設定し、遺跡の概要等を確認するための予備調査である。トレンチは路線中軸線及びその他の測量杭などを基準に設定し、調査位置を地形測量図上に明示できるようにした。

トレンチは16カ所に設定され、調査対象地域の西から順次番号を付した。これらのトレンチの総面積は、1,710㎡である。

調査期間は平成6年12月5日から12月27日までの16日間、及び平成7年9月28日から12月23日までの60日間で、総日数は76日である。平成6年度については対象地域の西半部の試掘調査と館跡の現況把握、平成7年度は東半部の試掘調査及び前年度の補足を行った。

なお、遺跡略号はYT-94・YT-95とし、発掘調査・資料整理にあたりこの略号を用いた。

(3)検出状況

試掘調査の結果、竪穴住居跡5棟、土坑6基、柱穴、溝などが検出され、ほかに時期不明の石垣が二条存在することが確認された。以下に各トレンチでの遺構・遺物の検出状況を述べる。

第1トレンチは、調査対象地域の西端に位置し、山口川に面する急斜面上の狭小な尾根部分に設定された。幅2ないし3mのトレンチを路線中軸線に直行してほぼ南北に設け、45㎡を調査した。尾根筋には遺構はみられなかったが、トレンチ西側の斜面部分に土坑が2基検出された。土坑は南北に細長く、長軸は等高線に平行する。トレンチ内での出土遺物は鉄滓のみである。

第2トレンチは、第1トレンチの東に位置する。尾根に挟まれた南向きの谷状緩斜面に幅3mのトレンチを直行して3本設定し、342㎡を調査した。東西トレンチの東側部分で竪穴住居跡と考えられる3mどの方形のプランが検出された。出土遺物は縄文時代の土器、石鏃、土師器、須恵器、羽口、鉄滓、陶磁器、寛永通寶などがあり、出土量もこのトレンチが最も多い。

第3トレンチは、谷状の部分から東の尾根に至る斜面部分に設定されたものである。この斜面には極めて不明瞭ながら2段の段状部分がみられ、これが館跡の遺構に関連するものか否かを確認するため調査を行った。その結果、堆積土層と基盤土の状況から中世遺構と考えられる痕跡はなく、それ以降の何らかの人為的関与によるものと判断された。ここでの出土遺物はなかった。

第4トレンチは、南向きの尾根の緩斜面に幅4mで設定し、56㎡を調査した。トレンチ南端の標高54m付近で、竪穴住居跡とみられる黒褐色土の落ち込みが検出された。ここでは土師器、鉄製品などが出土している。

第5～7トレンチは、第4トレンチの尾根の東に広がる緩斜面部分に設定され、3カ所のトレンチで336㎡を調査している。この地区では二条の石垣が現況で確認されている。石垣は標高46m及び49m前後の等高線に沿ってみられ、その規模は長さ80～90m、高さ1.5～2mである。一部は埋没しているが、人頭大ないし1m前後の未整形の花崗岩を積んでおり、下位の石垣のほぼ中央部には階段場の昇降部が取り付けられている。石垣の構築時期と、これに伴って形成された平坦面での遺構の状況を確認するため調査が進められた。調査の結果、トレンチ内では石垣の構築に伴った遺物は出土せず、その時期を判断するには至らなかった。また平坦面では表土直下で検出作業を行ったが、この面では明確な遺構を把握することはできなかった。出土遺物は近世以降の陶磁器、土師器、鉄滓のほかに縄文時代の遺物もみられた。

第8～11トレンチは、館跡の平場Ⅰの南々東斜面に設定され、4カ所のトレンチで61㎡を調査している。この斜面には三段ほどの帯状の平場がみられ、これらの内容を確認するために調査を進めた。各トレンチでは平場の形成に伴う整地土層とみられる堆積が観察されたが、柱穴・堀跡などは検出されなかった。出土遺物は羽口、鉄滓、磁器などがある。

第12～14トレンチは、館跡の中心的機能をもつと考えられる平場Ⅰと、これに付属する平場に設定され、3カ所のトレンチで358㎡を調査している。第12トレンチでは平場の縁辺部の状況を調査し、ここでは平場の形成に伴う整地土層がみられた。第13トレンチは第12トレンチの下位の平場に設定されたもので、植林地のため立木が多く遺構検出はこれらの木根部分を除いて行われた。ここでは柱穴あるいは土坑と考えられる直径40cm～1mほどの円形の遺構が検出され、一部で重複しているものもみられたが、木根が多く柱穴の配置を的確に捕らえることはできなかった。さらに下位の平場の第14トレンチでは、北端部に弧状の落ち込みが検出された。これは平場の北縁に沿うように幅3mほどの

幅をもち、トレンチ外にも続くとみられる。断面形状は未確認であるが、溝跡ないし堀跡、あるいは切岸下端に向かって傾斜した落ち込みと考えられる。遺物は第13トレンチから磁器片が出土している。



調査区配置図

Fig.17

第15、16トレンチは対象地区東端の尾根部分に設定され、2カ所のトレンチで519㎡を調査している。この尾根上には明瞭な平場の形成は認められないが、東斜面では幅6 m前後の平場がみられる。第15トレンチの北部では土坑及び竪穴住居跡とみられる遺構が検出された。これらは西向きの緩斜面にあり2 m以上の方形ないし楕円形の平面形を呈する。遺物は縄文時代の土器小片、フレイク、近世以降の磁器、寛永通寶、石臼破片などが出土している。第16トレンチでは明瞭な遺構を検出するに至らず、出土遺物もほとんどなかったが、一部に堆積土層の変化がみられた。

(4)出土遺物

調査によって出土した遺物は、縄文時代の土器・石鏃、古代の土師器、須恵器、鉄製品、羽口、鉄滓、近世の陶器、磁器、寛永通寶などである。遺物の出土量は第2トレンチで最も多く、次いで第4トレンチ、第15トレンチとなる。

1～3は、調査対象地区西部の第4トレンチから出土した遺物である。このトレンチでは尾根緩斜面に竪穴住居が確認されており、これらの遺物は住居跡の検出面とその周辺から出土したものである。1は坏形土師器の口縁部から体部にかけての破片で、口径は145mm、器高は6 cmほどと推定される。外面の中位には段がみられ、体部から内灣して口縁部に至る。内面はヘラミガキ調整が施され、黒色処理されており、外面はヘラケズリ後、ヘラミガキで器面調整されている。2は甕形土師器の口縁部から体部にかけての破片で、口径は180mmほどと推定される。口縁部は外反し、内外面ともヨコナデ調整されており、幅10mm前後の沈帯状の凹部を経て体部に至る。体部はハケメ調整で、外面が縦、内面は横方向に施されている。これらは奈良時代に属するものとみられる。3は楕円環状の鉄製品で一部欠損している。長径64mm、短径52mm、幅10～13mm、厚さ4～6 mm、重さは33.5gで、断面は長方形角状を呈する。

4は第2トレンチの竪穴住居跡付近の検出面で出土した須恵器である。底部から体部にかけての破片で、推定底径は113mm、胎土の色調は灰ないし灰黄色(5Y5/1～2.5Y7/2)を呈する。体部下端に耳状の把手が付されており、その中央部に孔が穿たれている。把手は長さ48mm、高さ14mm、厚さ6～11mm、孔は円形で直径6mmである。

5は第15トレンチから出土した石臼破片である。上臼側面の一部とみられ、把手を付けるための方形の孔が穿たれており、その周囲には菱形の装飾が浮き彫りされている。残存部は図の拓影で示した部分のみであるが、これから推定される外径は25cmほどである。

6～8は第2及び第6トレンチから出土した石鏃である。6は尖頭部と脚の一方が欠損したもので、現存長は39.3mm、幅19.4mm、厚さ5.4mm、重さは3.0gである。7は長さ23.8mm、幅16.9mm、厚さ3.0mm、重さ1.1g、8は側縁長21.2mm、幅12.5mm、厚さ2.6mm、重さは0.7gである。

(5)まとめ

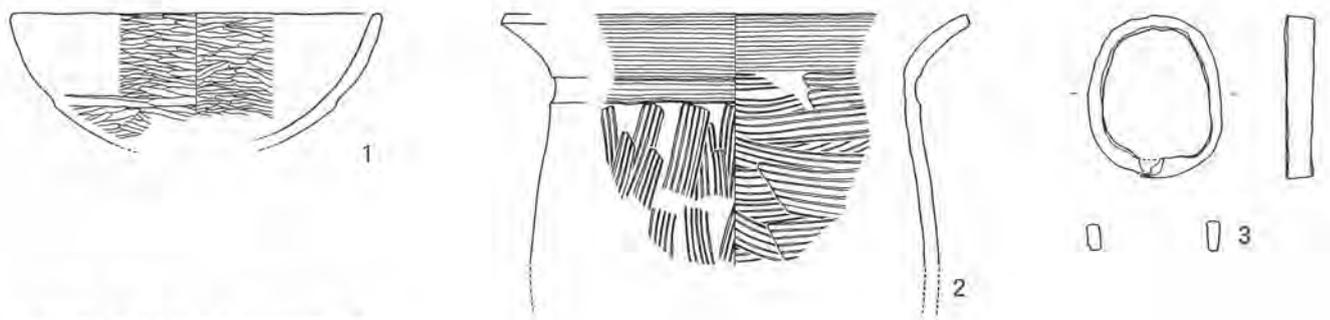
この調査は、対象地域内に設定したトレンチ内の部分的な試掘調査であるが、調査トレンチからは縄文時代、古代及び中世に属する遺構・遺物が検出され、各時期に互る人為的痕跡が残されていることが確認された。

山口館跡はこの地区では唯一の城館遺跡で、保存状態も良好であり、平場の構成は現況で大旨把握することができる。館跡の遺構については、現況でみられる平場などの在り方から明らかなように、館跡の中核的な機能をもつと考えられる平場Ⅰ及びこれに付属する地区が、山口館跡の歴史的意味を

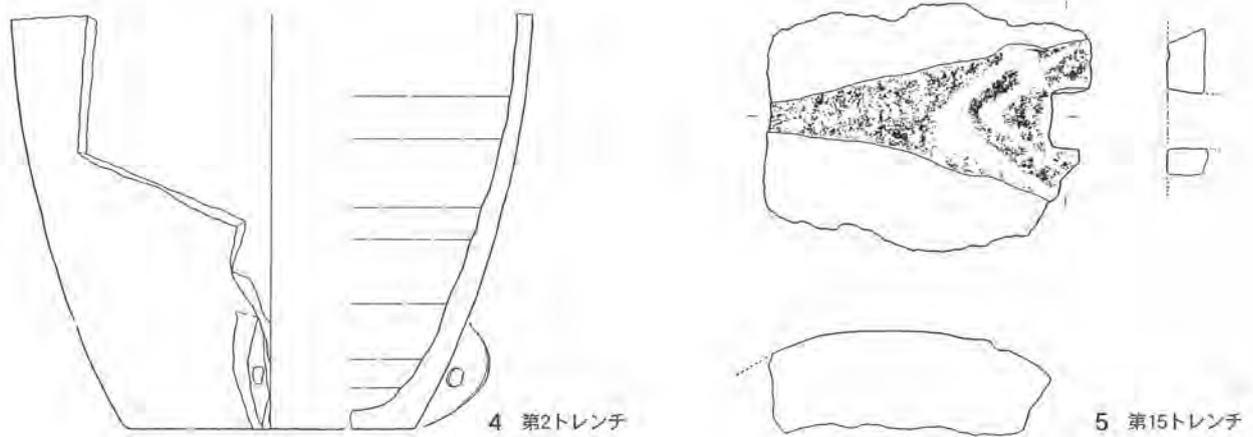
見定める上で重要な位置を占めるものと考えられる。この調査でも柱穴などが検出されていることから建物跡の存在はほぼ確定的とみられ、館跡に設置された施設の内容を把握することができるという点からも重要な地区であるといえる。

石垣の構築時期については明らかにできなかったが、館跡の縄張りがこの地区にまで及んでいるか否かについては、館跡の構成や当時の集落の在り方などに関連し重要である。また出土遺物から、石垣の構築とこれに伴う整地が行われる以前の旧地形に、古代・縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられる。

尾根及び谷状の緩斜面には、奈良・平安時代の遺物とともに竪穴住居跡が検出されているが、これまでの調査例からみて、地形的に類似する範囲の中にこれらの遺構がさらに存在する可能性は高いと考えられる。

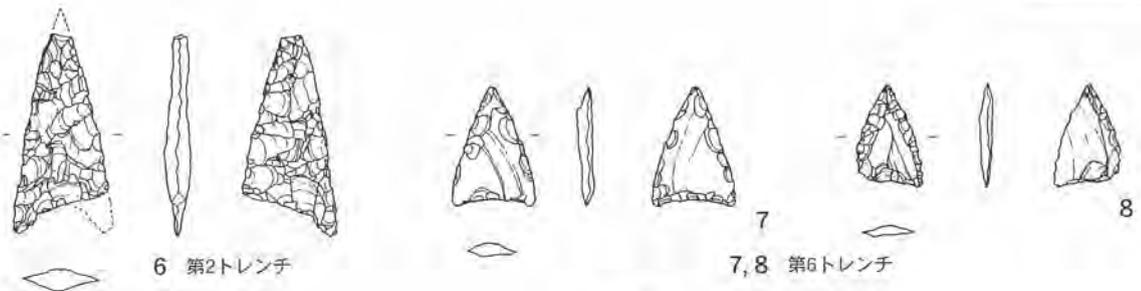
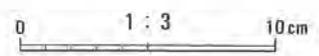


1~3 第4トレンチ竪穴住居跡検出面



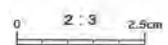
4 第2トレンチ

5 第15トレンチ



6 第2トレンチ

7,8 第6トレンチ



出土遺物

Fig.18

報告書抄録

ふりがな	あかばたけいせき てんじんやまいせき やまぐちたてあと							
書名	赤畑遺跡・天神山遺跡・山口館跡							
副書名	北部環状線道路関係埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	51							
編著者名	竹下将男							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL.0193-62-2111 FAX.0193-63-9119							
発行年月日	1998年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
天神山遺跡	いわてけん みやこし 岩手県宮古市 おおあぎやまぐち 大字山口第11 あかばたけ 地割字赤畑	03202	LG23-2246	39°38'54"	141°56'14"	19940720 ~19941118	794m ²	道路新設工事
赤畑遺跡	みやこし やまぐち 宮古市山口 五丁目	03202	LG23-2215	39°39'03"	141°56'09"	19950928 ~19951124	1,180m ²	道路新設工事
山口館跡	みやこし やまぐち 宮古市山口 第5地割 あざくぼ 字久保	03202	LG23-2310	39°39'00"	141°56'28"	19941205 ~19941227 19950928 ~19951223	1,710m ²	道路新設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
天神山遺跡	散布地	縄文・弥生	陥し穴状遺構	弥生時代後期土器				
赤畑遺跡	集落	縄文・古代 中世	遺物包含層	縄文時代中期・後期・晩期土器・石器・土師器 鉄滓・羽口・陶磁器				
山口館跡	城館	古代・中世	竪穴住居跡 土坑・柱穴	縄文時代土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品 羽口・鉄滓・陶磁器・寛永通寶			試掘調査	

《第Ⅲ章参考文献》

- 田村忠博 1986 『宮古地方の中世史 古城物語』
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 田村壮一 1987 『陥し穴状遺構の形態と時期について—岩手県北
 地方を中心として—』 同センター紀要Ⅶ
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990 『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書—宅地造成関連遺跡発掘調査—』
 同センター埋蔵文化財調査報告書第146集
 宮古市教育委員会・田老町教育委員会 1982 『黒森神楽(資料編)—黒森神楽調査報告1』
 宮古市教育委員会 1988 『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群(堀合館)』 宮古市埋蔵文化財調査報告書14
 宮古市教育委員会 1991 『弘川Ⅰ遺跡—平成2年度発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書29
 宮古市教育委員会 1996 『大村遺跡—平成5・6年度発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書48
 宮古市教育委員会 1997 『花原市遺跡—平成8年度発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書49

写 真 图 版



photo.2
遺跡周辺垂直写真

天神山遺跡



photo.3
天神山遺跡空中写真 (南より)



photo.4
天神山遺跡遠景



photo.5
FW1~3, NSトレンチ(東より)



photo.6
EW-1トレンチ陥し穴状遺構検出状況(北東より)



photo.7
陥し穴状遺構JT01,02(南東より)



photo.8
陥し穴状遺構JT01(北西より)



photo.9
陥し穴状遺構JT02(南東より)



photo.10
陥し穴状遺構JT01埋土堆積状況



photo.11
基本土層堆積状況 (TP-N)

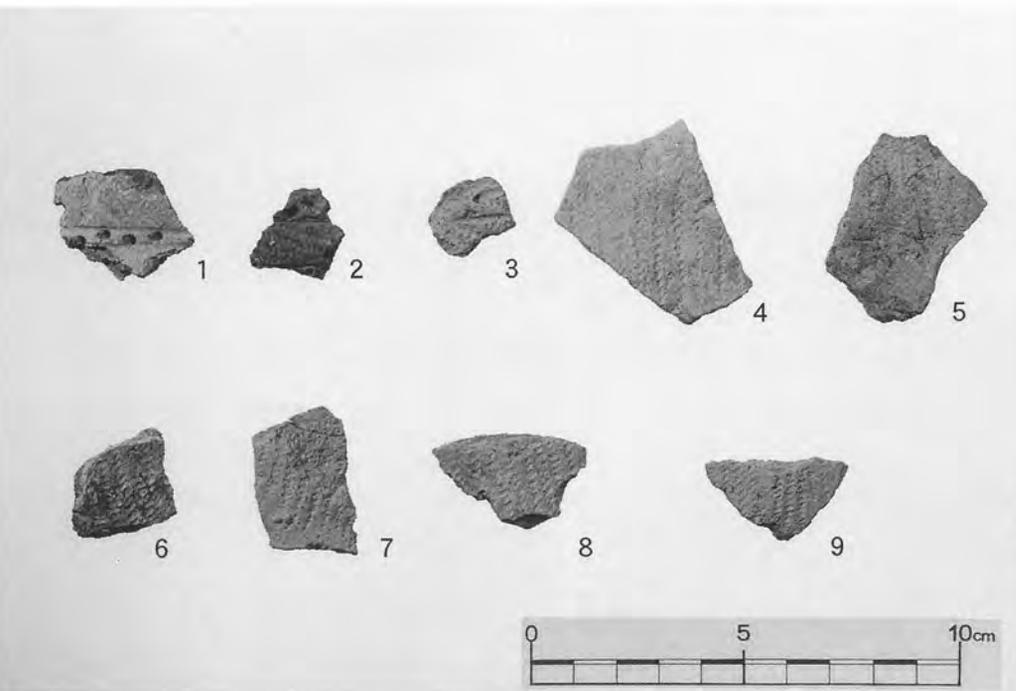


photo.12
出土遺物

赤畑遺跡



photo.13
赤畑遺跡空中写真 (東より)



photo.14
第1調査区遠景 (北東より)



photo.15
第1調査区調査前の状況 (南より)



photo.16
第1調査区A~Cトレンチ (南より)



photo.17
Aトレンチ検出状況 (南西より)

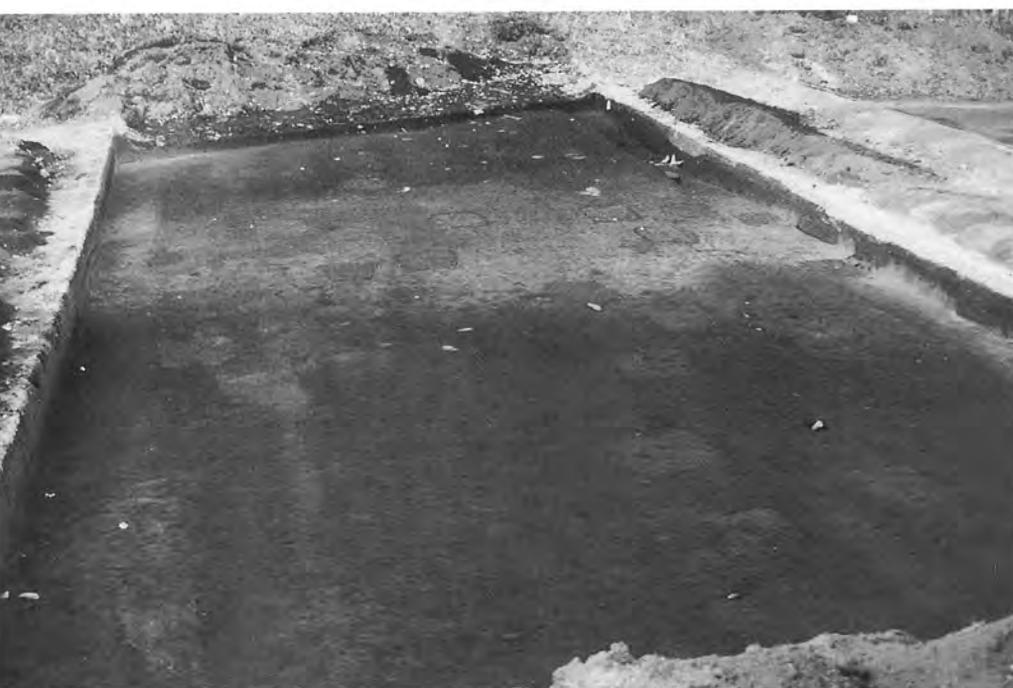


photo.18
Bトレンチ検出状況 (東より)



photo.19
Cトレンチ検出状況 (北東より)



photo.20
Bトレンチ土層堆積状況 (南西より)



photo.21
Aトレンチ火山灰検出状況



photo.22
第2調査区遠景（北東より）



photo.23
第2調査区調査前の状況(南より)



photo.24
Dトレンチ検出状況（南より）



photo.25
Eトレンチ検出状況 (南西より)



photo.26
Fトレンチ検出状況 (南西より)



photo.27
F-NSトレンチ土層堆積状況 (南東より)



photo.28
F-NSトレンチ黒褐色土堆積状況（東より）

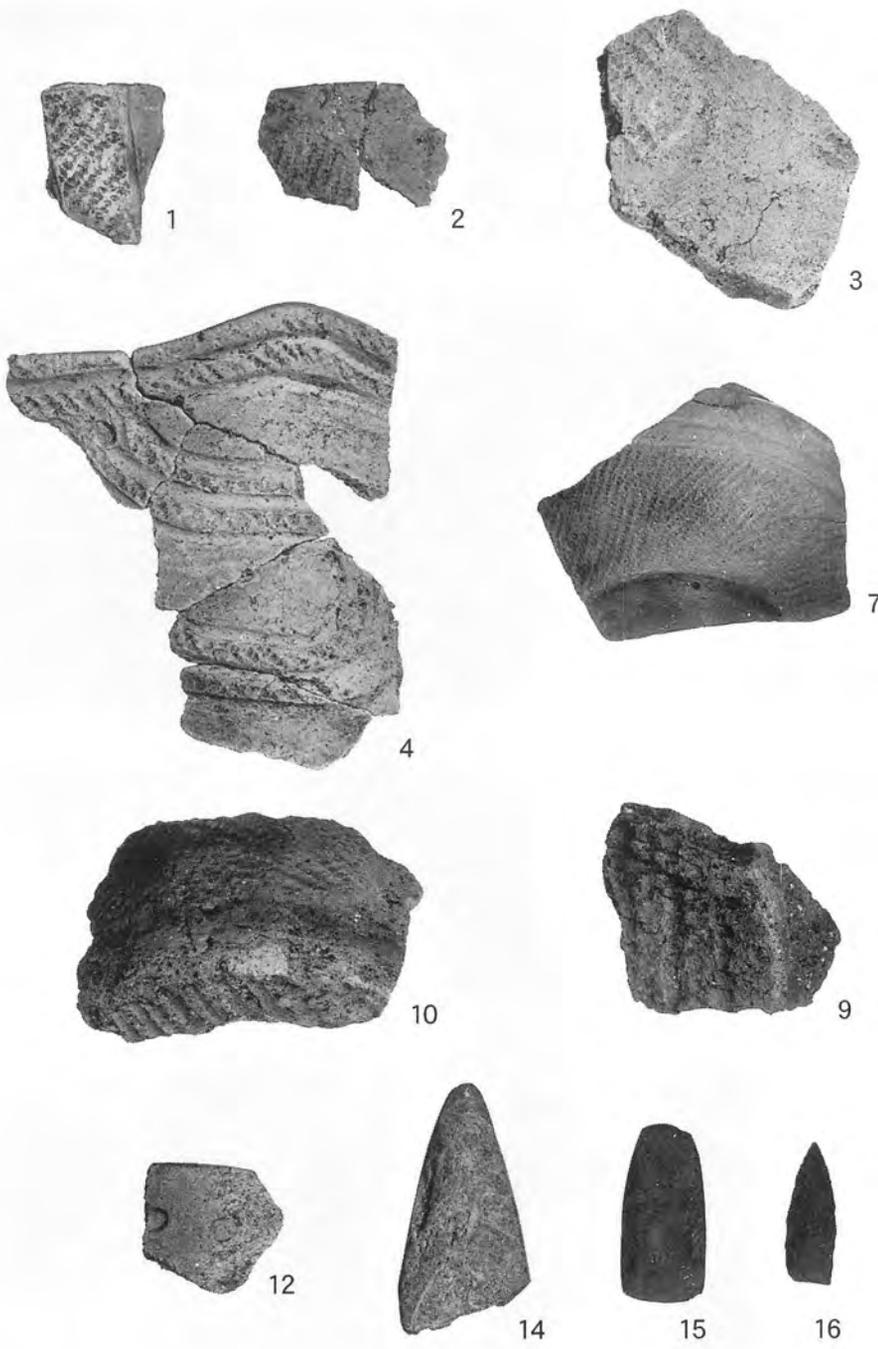
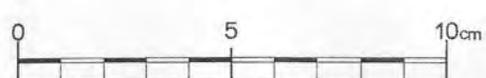


photo.29
出土遺物



山口館跡



photo.30
山口館跡空中写真（南より）



photo.31
第1トレンチ検出状況（北より）



photo.32
第2トレンチ検出状況（北より）



photo.33
第2トレンチ竪穴住居跡検出状況（北西より）



photo.34
第4トレンチ竪穴住居跡検出状況（南より）



photo.35
第6トレンチ検出状況（西より）



photo.36
第6トレンチ石垣の状況 (南東より)



photo.37
第13トレンチ検出状況 (北より)



photo.38
第14トレンチ検出状況 (北より)



photo.39
第15トレンチ竪穴住居跡検出状況（西より）

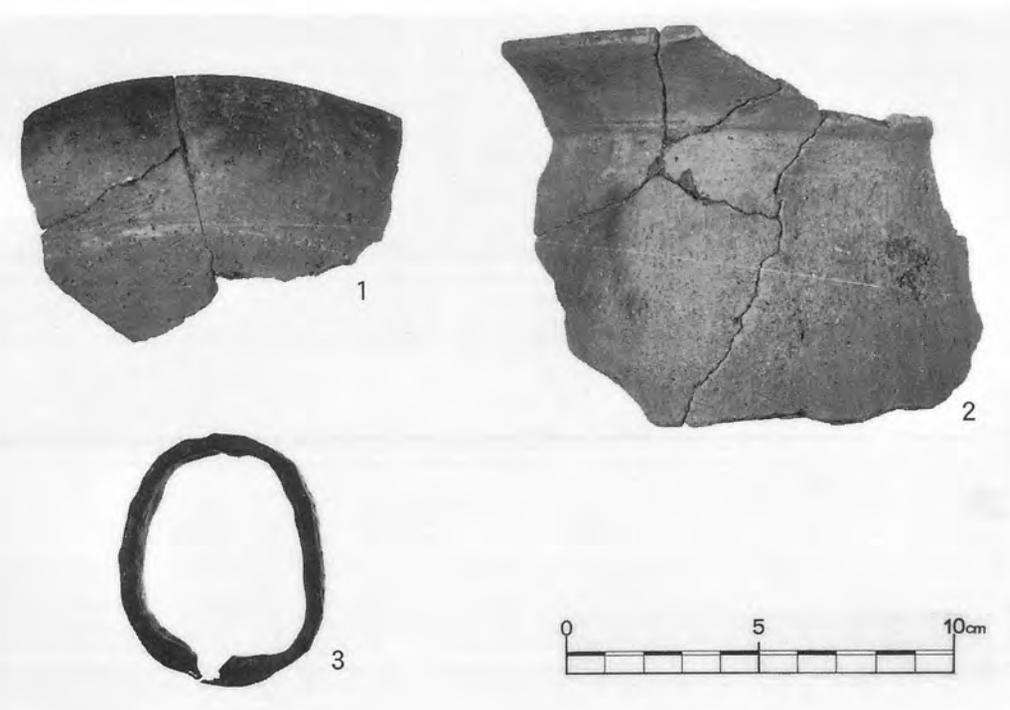


photo.40
第4トレンチ出土遺物

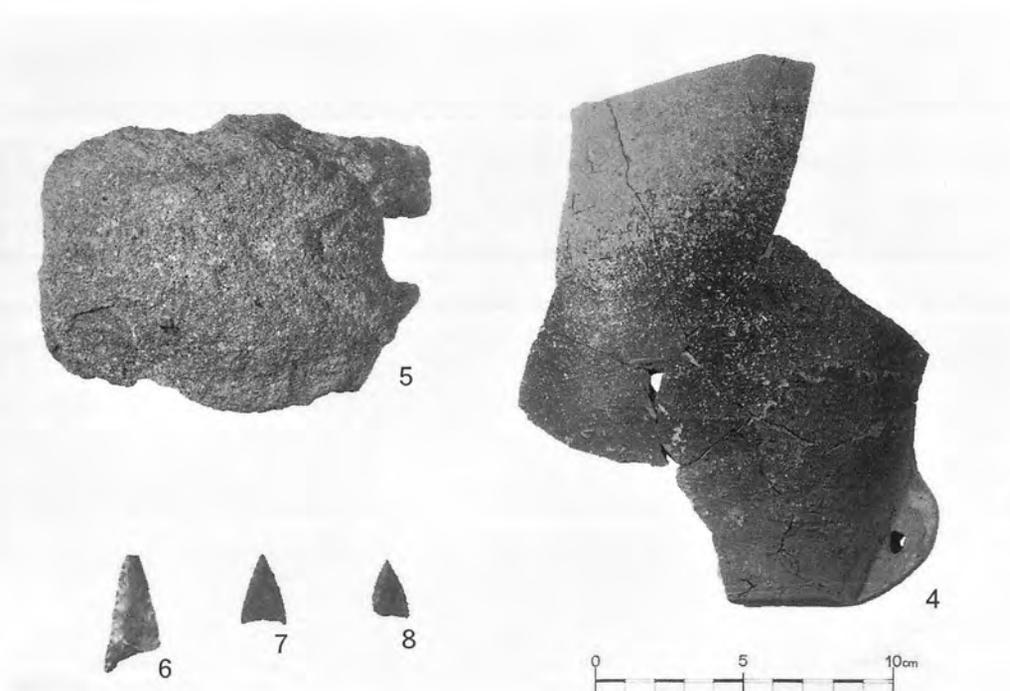


photo.41
第2,6,15トレンチ出土遺物

宮古市埋蔵文化財調査報告書51

あかばたけ い せき てん じんやま い せき やまぐち たて あと
赤畑遺跡・天神山遺跡・山口館跡

—北部環状線道路関係埋蔵文化財調査報告書—

1998.3

平成10年3月25日発行

発 行 岩手県宮古市教育委員会

〒027-8501 宮古市新川町2番1号

TEL.0193-62-2111

印 刷 株式会社 文化印刷

〒027-0037 宮古市松山5-13-6

TEL.0193-62-4578(代)
